作品紹介　―賛助作品―

技術顧問　寺本蒼玄先生



『優遊』（潘岳）
（世事に煩わされないこと。）
「優遊」
にじみの多い紙で味わい深い作品に仕上げました。



『醉裏樂天真』
（酔った後を自由に楽しむ。）
「醉裏樂天真」
爽やかに自由奔放に書いてみました。

作品紹介　―西来院―

一、浅野彰浩　二回生

創作　調和体　『大河』　全紙

「大河は紆余曲折を辿れども大海に至ることを忘れない」

造像記風の書体を使って調和体にも挑戦してみた。高校卒業の前に先生が引用された詩。正確には覚えていないが、「大志をもった者は困難に道を阻まれてもそれを乗り越え、最後にはその理想にたどり着くことを忘れずに努力し続ける」という意味。



二、稲葉由花利　一回生

臨書　隷書　『曹全碑』　半切

「君諱全字景完敦煌效穀人也其先蓋周之季胄」

初めて臨書に挑戦しました。訳も分からず手探りで書いた作品ですが、お見苦しくなく仕上がっていれば幸いです。



三、上田　美幸　二回生

臨書　楷書　柳公権『玄秘塔碑』　半切

「開法場於秘殿為人請福親奉香燈」

力強いなかにある穏やかさを表現できたら・・・。未熟な作品ですが、ご批評お願いします。



四、植野正嗣　博士二回

臨書　飛白体　空海『益田池碑銘』　半切

「大和州益田池碑銘並序　沙門遍照金剛文并書」

様々な書跡を眺めていると、一際目を惹く絵文字のような作品群がありました。一身上の都合により作品を書く機会は少なそうなので、印象に残った順に、これを描くことにしました。一見すると前衛書のようですが、篆隷などの書法に忠実な画もあり、奥が深いです。せめて雰囲気が出せていたら、と思います。



五、大石龍太　一回生

臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　半切

「故以智通無累神測未形超六塵而」

褚遂良の雁塔聖教序を臨書しました。楷書でありながら線の流麗さや始筆の柔和さなどの特徴を持つこの作品の雰囲気を出そうと意識しましたが難しかったです。また、習字をやっていた頃の癖で線が角張ることの無いように気を付けました。

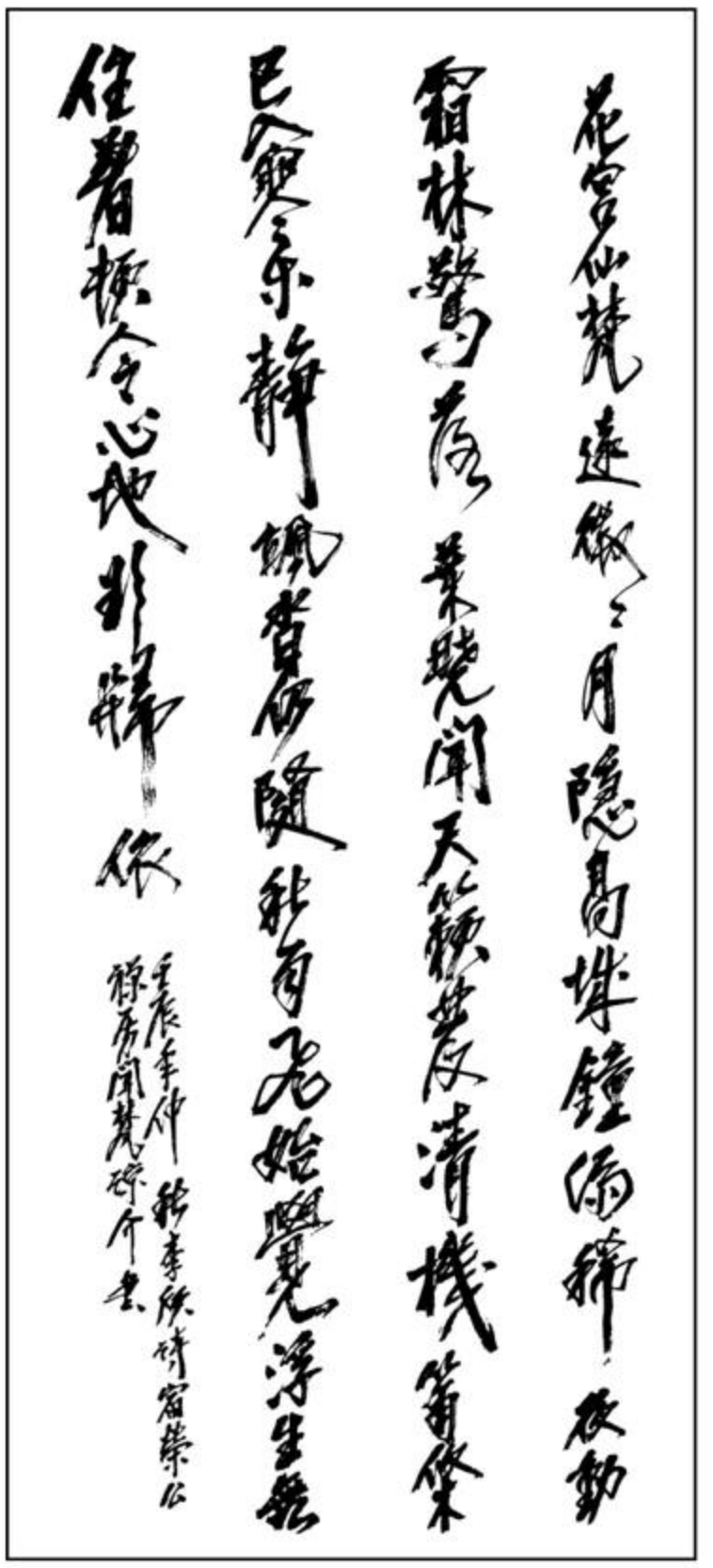


六、大庭諒介　三回生

創作　行書　李頎『宿瑩公禪房聞梵』　二・六尺×六尺

「花宮仙梵遠微微　月隠高城鐘漏稀　夜動霜林驚落葉　暁聞天籟發清機　簫條已入寒空静　颯沓仍隨秋雨飛　始覺浮生無住著　頓令心地欲歸依」

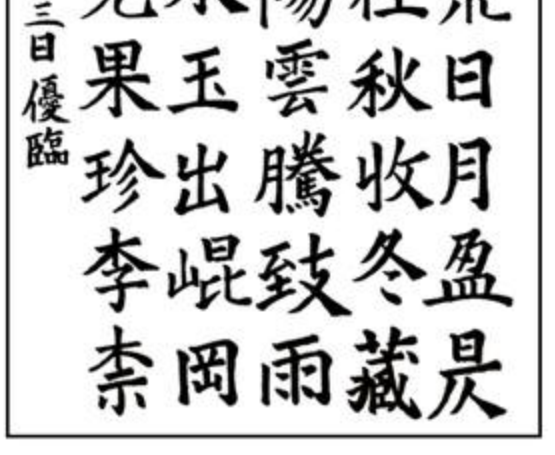
字形は呉昌碩から集字。この漢詩は「夜中、霜枯れした林の中で読経や木々の音色を聴く」という秋の情緒的な詩だったこともあり、墨を潤させた部分から徐々に字形や線質を厳しくしていくようなイメージを持って取り組んだ。作品中のどの部分に墨を持たせ、また行間の白をどのように表現していくかを課題とした。



七、大庭諒介　三回生
創作　行書　『風の跡形』　行灯
「風」
日本語には風景、風土といった言葉があるように、景観と「風」は密接に関連があるように思われます。秋に黄金色の稲穂が風に揺れたり、荘厳な雲の造形がそれに当ると思います。人は景観をただ視覚的に捉えると同時に、今もどこかで織り成した風の跡形を、様々な形で感じているのかも知れません。この作品では敢えて、その不可視な風の〈あとかた〉を「書道×行灯」で表現してみました。

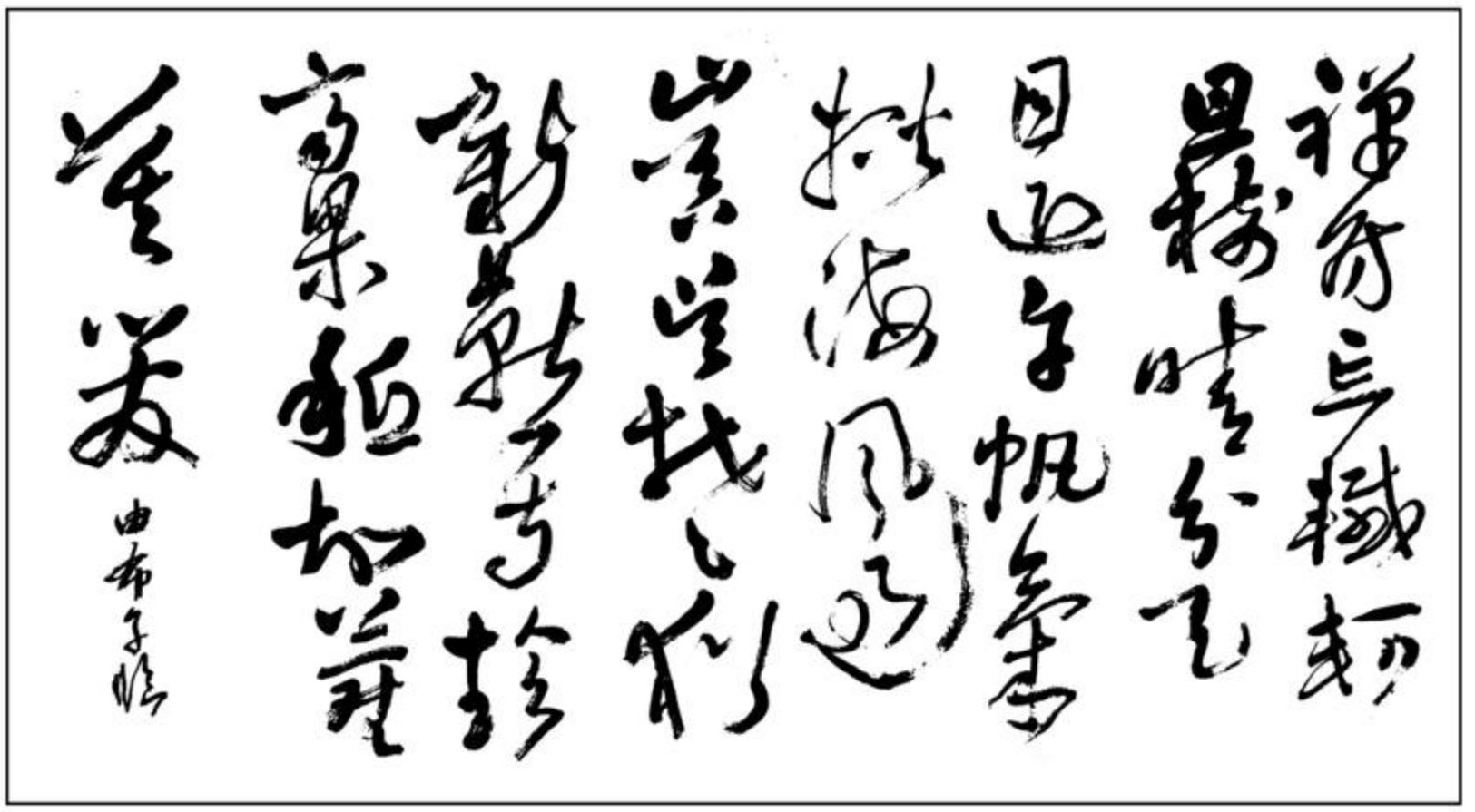


八、奥山優　三回生
臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　半切
「天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張寒來暑往秋收冬藏閏餘成歳…」
以前から挑戦してみたかった楷書千字文を書きました。集中力を維持することと、均一な線質を保つのに苦労しました。気をつけた点はミスをしないことと、整然と文字を並ばせることです。ご批評のほどよろしくお願いします。



（一部のみ掲載）

九、尾崎由布子　四回生
臨書　草書　王鐸『草書七律五首巻』　全紙横
「禪房忘轗軻旦樹晴分天目近午帆氣挾海風過山呑吳楚猶新燕寺趁斎梁秖故蘿莫管」
学部生最後になるであろう作品ですが、ここに至ってあえての王鐸臨書です。なかなか書道に時間が割けない中での久しぶりの臨書、ほぼ初めての王鐸ということでいっぱいいっぱいになってしまったのは残念ですが、書いていて結構楽しかったです。自己満足に陥らないようしっかり書きたいと思います。



十、小野愛実　三回生

臨書　行書　董其昌『邠風図詩巻』　半切

「竹歌明河霓羽紛相逐詎擧三推古籍」

洗練された美しさに惹かれて書いてみましたが、なかなか難しかったです。書も自分自身もエレガントでありたいものです。



十一、川上澄香　二回生

臨書　隷書　『曹全碑』　半切

「賢孝之性根生於心牧養季祖母供」

曹全碑を臨書しました。やわらかい印象の隷書に一目惚れして初めて書きました。字の大きさを揃えることに苦労しました。書道を始めたばかりで右も左もわからないなりに頑張りました。



十二、木谷亮太　修士一回生

臨書　行書　顔真卿『争坐位稿』　半切

「于右僕射完襄郡王郭公蓋太上」

最も自分にとって書きやすい古典を半切二行臨書作品にまとめることで自身の書のテンプレート化を反省してみよう、というコンセプトのもとに書きました。御批評のほどよろしくお願いします。

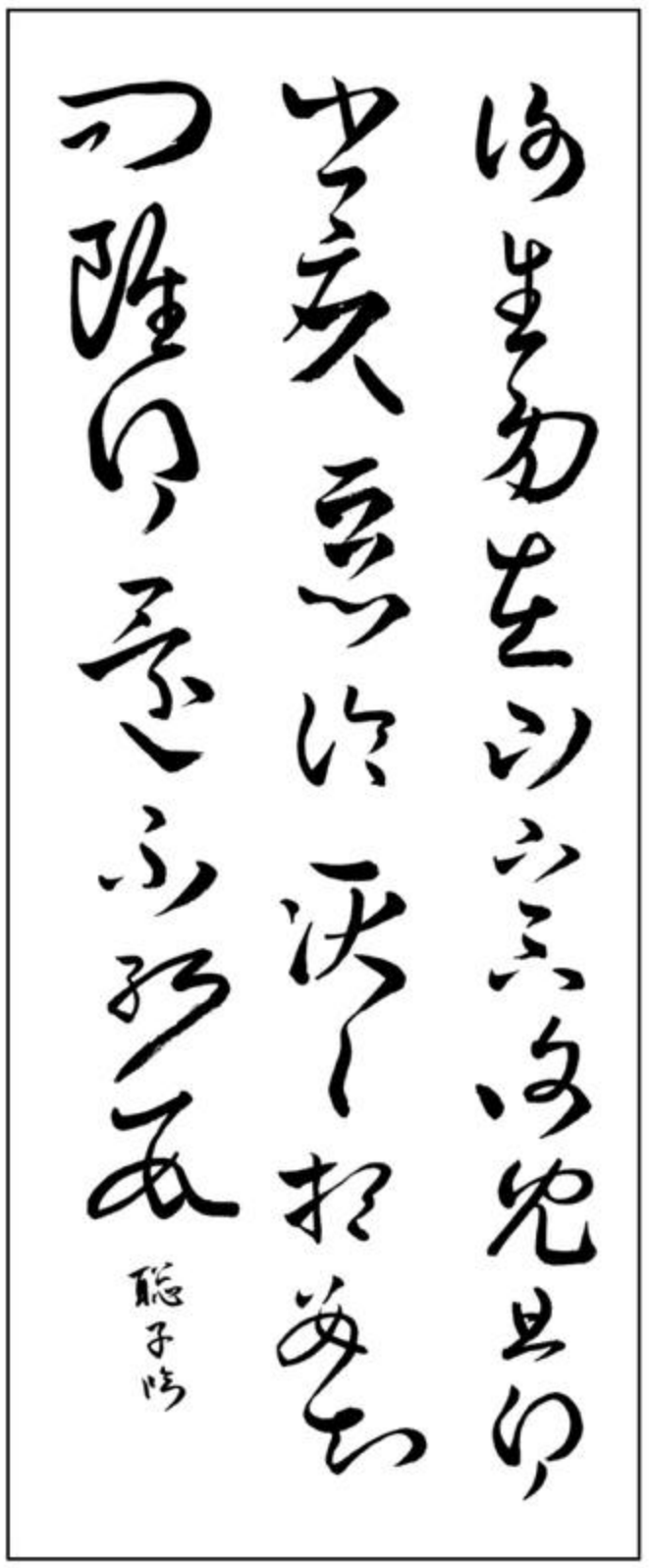


十三、小松聡子　二回生

臨書　草書　王羲之『謝生帖』　聯落

「謝生多在山下。不復見。且得書。疾悪冷耿々。思数知問。雖得還。不能数。」

仮名を書いていた反動からか、のびのび大きく書きたい！と思ったのがきっかけでした。しかし、自分のヘタレさや思い切りの悪さなどを直視することになり・・・。書道の面においても、性格についても、一皮むけることができるようにがんばりました。



十四、佐藤綾美　三回生

臨書　草書　近衛家熙『丹扆六箴屏風』　半切

「先王聽政昧爽以候鷄鳴既盈日出而」

今回は作品としてどのようにまとめるかを特に意識しました。近衛家の方の書ということで雅なイメージで書きたかったのですが、難しかったです。



十五、柴田翔　二回生

臨書　草書　陳璧『秋深帖』　聯落二連

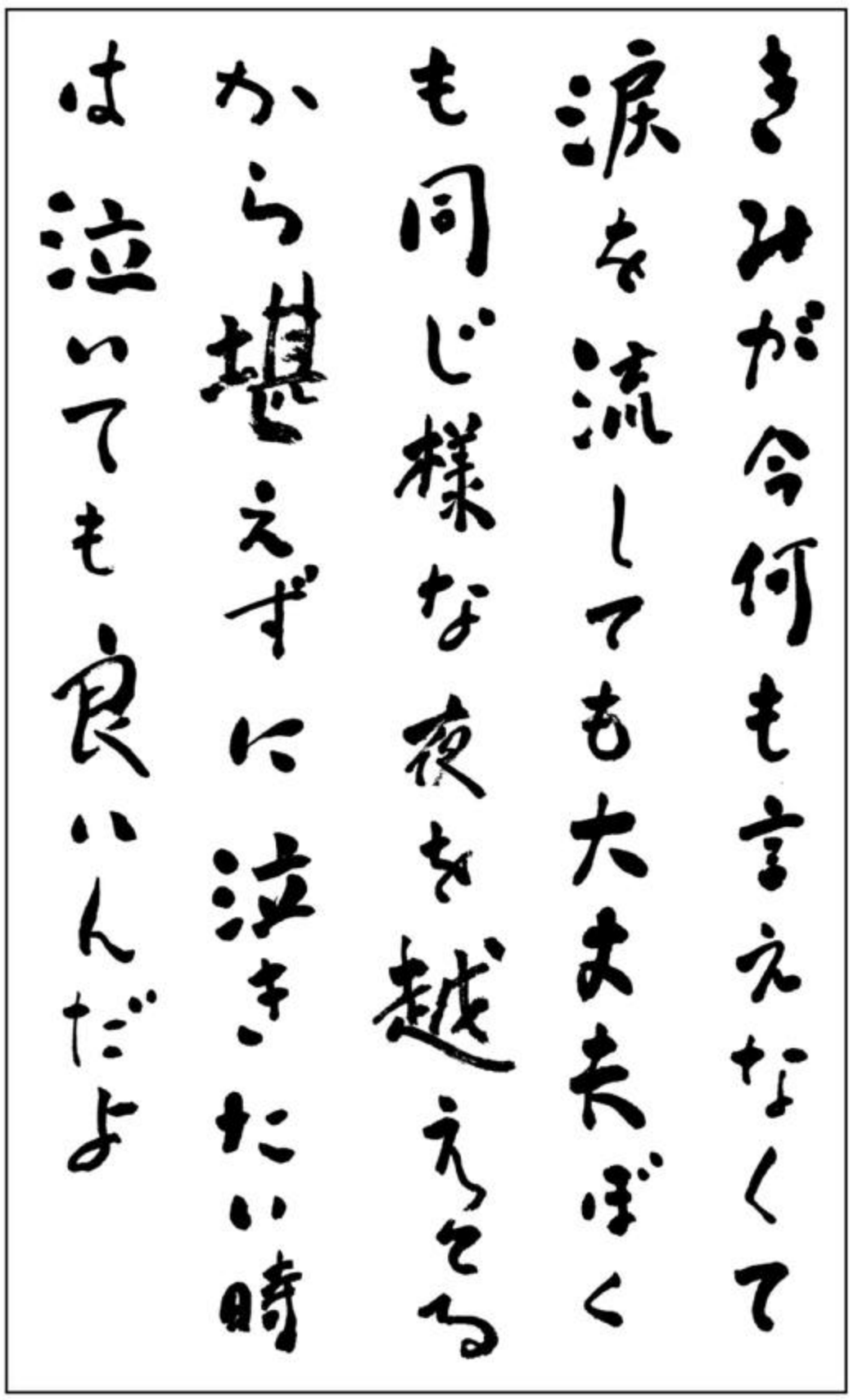
「秋深。不審氣力復如何也。僕疾弊何足可論。河南送物人。近來得京中消息。承彼數年不熟。憂懸不復可論。不委諸小大。如何爲活計。幾日有京中信。使走告。當數報委曲耳。」

晩秋の時節、天高く馬肥ゆる秋に相応しい作品をという思いで臨書しました。紅葉の舞い落ちる軌跡を想わせる連綿線や、凄然と澄み渡る秋空を彷彿とさせる余白の空間。形臨を心掛ける一方で、こうした視覚的なイメージが籠った表現というものも意識しました。暮れの秋に漂う、どこか落莫とした風情を感じて頂けたら幸いです。





十六、杉本綾香　三回生
創作　調和体　『大丈夫だよ』　全紙
「きみが今何も言えなくて 涙を流しても 大丈夫 ぼくも同じ様な夜を越えてるから 堪えずに泣きたい時は泣いても良いんだよ」
自分の未熟さが悔しくて押しつぶされそうだったある曇り空の日に、一人で聞いてた歌詞を題材にしました。調和体は初めてなのでかなり挑戦的なことをしたのですが、あの時のささやかな暖かさを少しでも表現したくて作品と向き合いました。未熟な作品ですが、ありのままに頑張りました。



十七、鈴木遼　三回生
臨書　行書　最澄『最澄将来越州録』　半切
「和上導雨僧治道場列茶羅壇場現家授」
最澄さんの字の雰囲気に魅せられました。色んな線があっておもしろいところをまねしたいと思ったのですが、難しかったです。練習不足で未熟な作品ですがご批評よろしくお願いします。



十八、多門千早　二回生
臨書　行草　何紹基『山谷題跋語四屏』　半切
「匹帋子予一擧覆因為落筆倦」
力強くどっしりとした字が好きな私にしてはなかなかの挑戦な作品です。線質や字間の白さから作品独自の空気感を感じていただけたらそれほど嬉しいことはないです。まだまだ未熟ですがご批評のほどよろしくお願いいたします。



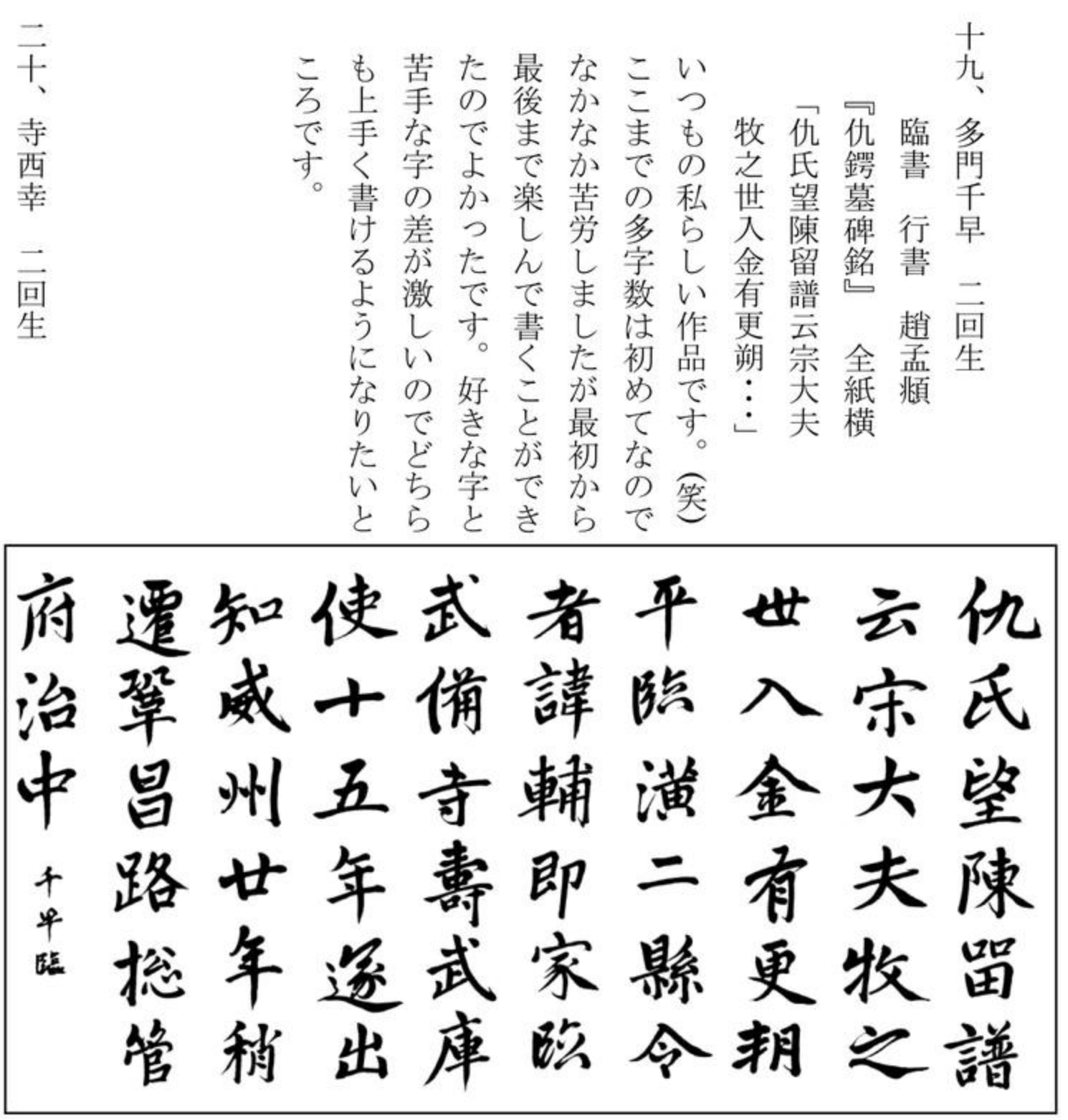
十九、多門千早　二回生

臨書　行書　趙孟頫

『仇鍔墓碑銘』　全紙横

「仇氏望陳留譜云宗大夫
牧之世入金有更朔・・・」

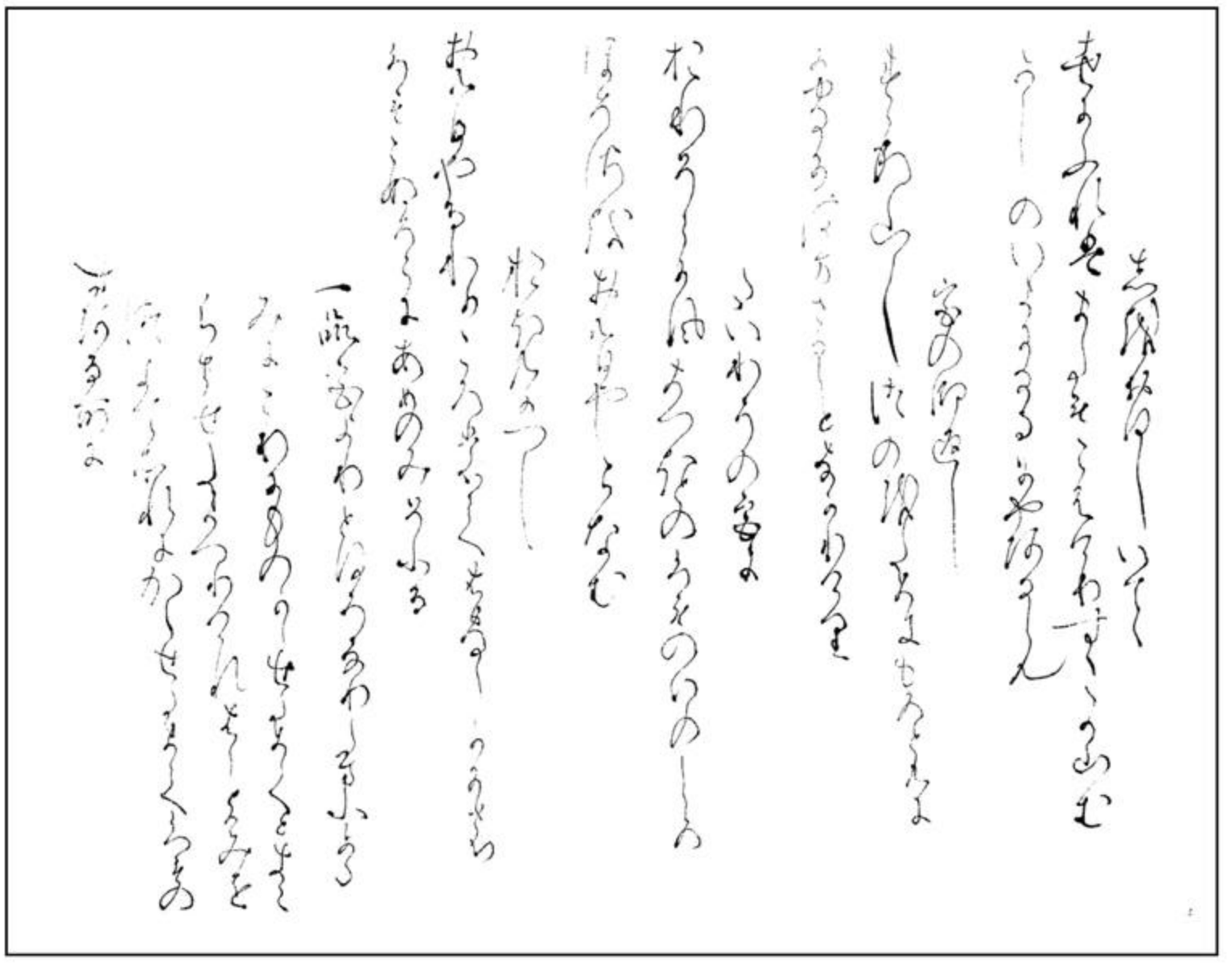
いつもの私らしい作品です。(笑)
ここまでの多字数は初めてなので
なかなか苦労しましたが最初から
最後まで楽しんで書くことができ
たのでよかったです。好きな字と
苦手な字の差が激しいのでどちら
も上手く書けるようになりたいと
ころです。


仇氏望陳留譜
云宗大夫牧之
世入金有更朔
平臨潢二縣令
者諱輔即家臨
武備寺壽武庫
使十五年遂出
知威州廿年稍
遷翌昌路摠管
府治中
千平臨

二十、寺西幸　二回生

臨書　仮名　伝小野道風『小島切』　35cm×100cm(約半切七/九)

「し(志)を(越)おぼ(保)しいでゝ(て)　世に(尓)ふれば(盤)また(多)も(毛)こえ
け(介)り(利)すゞか山むかしのいまに(尓)な(奈)るに(尓)やあ(阿)るらん　宮の
御返し　す(春)ゞか山しづ(徒)のを(越)だ(多)まき(支)もろとも(无)にふ(布)る
に(尓)はま(万)さることな(奈)か(可)り(利)け(介)り(里)　だ(多)いわうの宮に
(尓)　おほぞらに風まつほ(本)どのくも(毛)のいのこゝろぼそ(曽)さ(佐)を(越)
おも(无)ひ(日)やらなむ　お(於)ほ(本)んか(可)へし　おも(无)ひ(日)やるわが
(可)ころも(裳)で(弖)は(者)さ(散)ゝが(可)に(尓)の(農)くも(毛)らぬそ(曽)らに
(尓)あめのみぞ(曽)ふる　一品宮より(利)、とほ(保)うな(奈)り(利)た(多)ま(万)
ふか(可)た(多)みに(尓)、これに(尓)ものか(可)ゝせた(多)まて(弖)とき(支)こえ
させた(多)まへり(利)け(介)れば(者)・・・」



秋風が心地いいので窓をあけていたら神社のほうから横笛の音色が聞こえてきて、なんだか平安時代にタイムスリップしたような気分で書いていました。かな作品ははじめての試みでなにもわからないとこからでしたが、書いていると時間をわすれてしまうような楽しさがありました。余白やゆれのうつくしさ、繊細さと濃淡による優雅さをもつ原本にははるかに及びませんが、この法帖に出会ってよかったと感じています。

二十一、時藤大典　三回生

創作　少数字書『乾坤』　全紙横

「乾坤」

今年の夏に中国の内蒙古に行って来ました。草原を五日間、馬で駆け、日本では想像できない〝広がり〟を感じました。そこで、「天地」を意味する「乾坤」という言葉を書いてみました。　また今回は、一度に一枚か二枚だけ書くにとどめ、技術的なことを考え過ぎることを止めました。素直な感動が伝われば幸いです。



二十二、中川和也　四回生

創作　前衛　『叫―sakebi―』　三尺×六尺横

「叫」

「叫」この文字を心に描きながら、深夜のＢＯＸ棟のガランとした一室で、一枚の真っ白な紙に向かう。しだいに膨らんでいく「叫」の造形への衝動を、一瞬でバァン！！と発散することで、この作品は生まれました。作家の身体のうごめき。その時の墨のほとばしり。そういった光景がありありと目に浮かんで、制作時の僕の身体感覚を追体験できるような、そういう作になっていればと思います。「読める」ということを超えて、人間の言語野ではとらえきれない深い感覚に響いて「感じて」いただければうれしいです。四年間の集大成たるか。

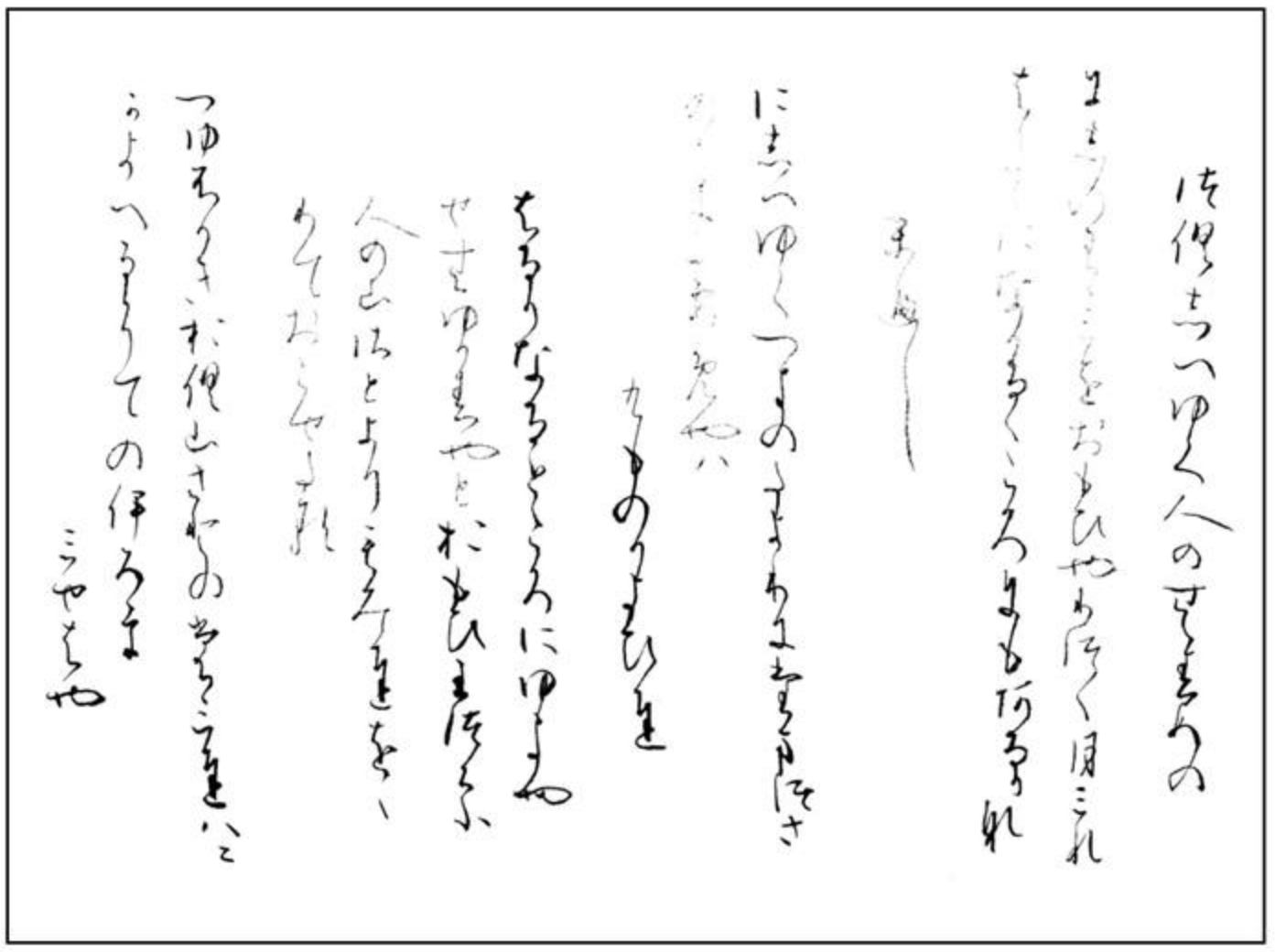
No Image

二十三、中田真規　二回生

臨書　仮名　深山龍洞『紫式部集抄』　半懐紙

「つくしへゆく人のむすめの　にしのうみをおもひやりつつ月みればた
だになかるるころにもあるかな　かへし　にしへゆくつきのたよりに
たまづさのかきたえめやはくものかよひぢ　はるかなるところにゆき
やせむゆかずやとおもひわづらふ　人の山ざとよりもみぢをりてお
こせたる　つゆふかきおく山さとのもみぢばはかよへるそでのいろを
みせばや」

今回は平安でも江戸でもなく、昭和の書家さんの仮名を臨書しました。「西へゆく月のたよりに玉づさの書き絶えめやは雲の通ひ路」と「露深くおく山里のもみぢばに通へる柚の色を見せばや」は溢れる感情を全て筆に託しました。



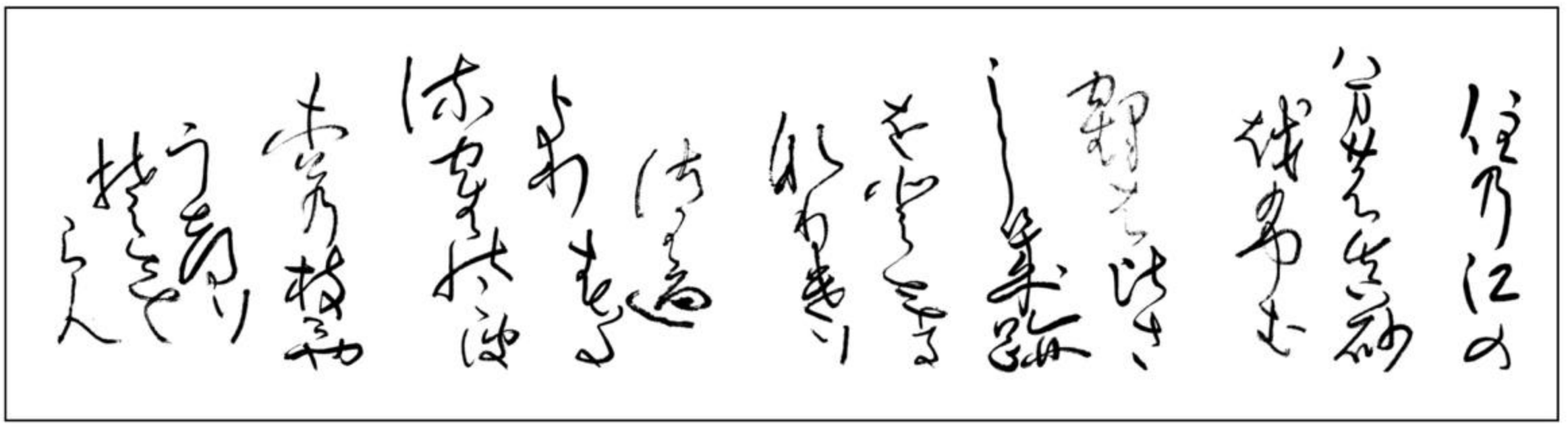
二十四、中谷百花　一回生

創作　仮名　『鶴』　二尺×八尺横

「住の江の
浜の真砂をふむ鶴は
久しき跡を
とむるなりけり

さわへより
すだちはしむる
鶴のこは
松の枝にや
うつりそむらん」

無謀にも仮名を創作で書いてみようと思いました。冬の鶴の姿を詠んだ伊勢と西行の二句を並べた作品です。まだまだ未熟ですが、ご批評のほどよろしくお願いします。

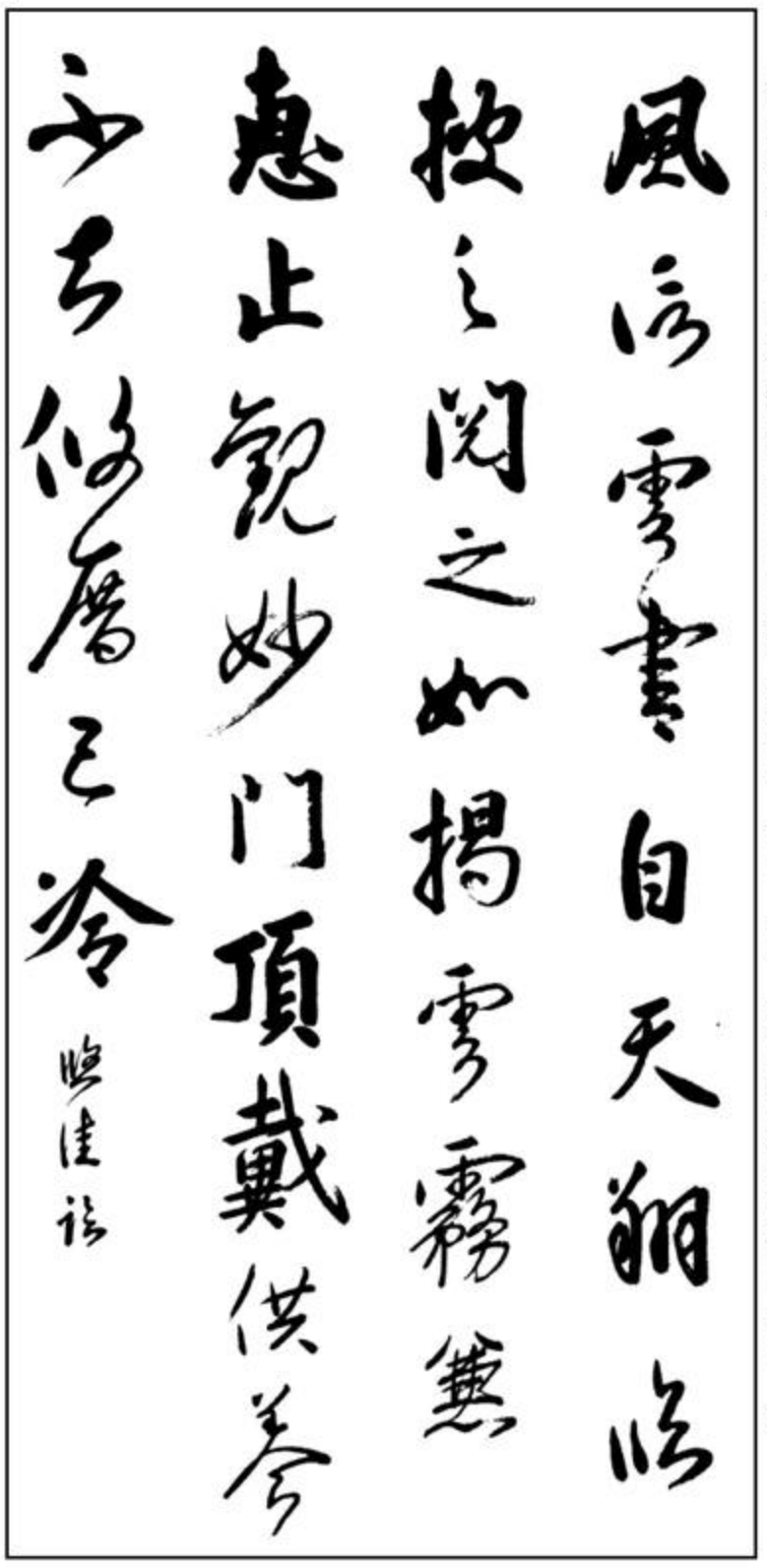


二十五、林田悠佳　四回生

臨書　行書　空海『風信帖』　全紙

「風信雲書自天翔臨披之閲之如掲雲霧兼恵止観妙門頂戴供養不知攸暦已冷」

変化に富んだ空海の書に憧れて臨書しました。墨量に気を配りました。



二十六、東村智佳　一回生

臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切

「皇帝避暑乎九成之宮此則隨之仁」

九成宮の美しい字形が気に入ったので臨書しました。運筆の仕方を完全に習得することが今後の最大の課題です。足りないところも多い作品ですが、一生懸命、試行錯誤しながら書きました。

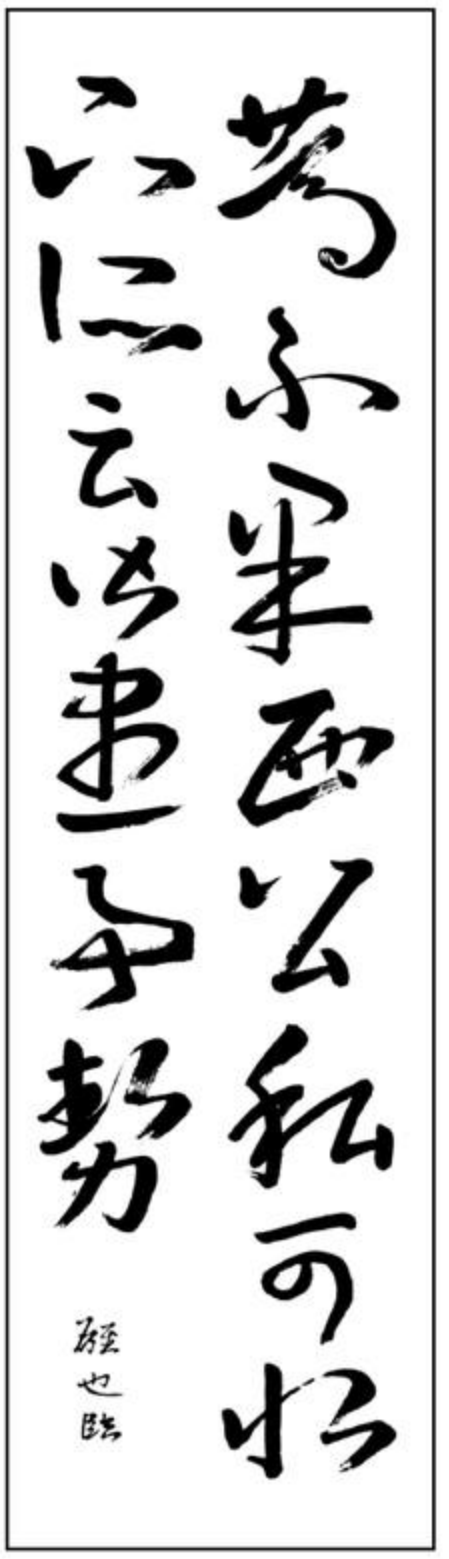


二十七、藤田雄也　一回生

臨書　草書　王羲之『十七帖』　半切

「篤。不果西。公私可恨。足所云。皆盡事勢。」

草書という字体がかっこいいと思いこの作品を書きました。初めての作品ということで至らない点がたくさんあると思いますが、草書のかっこよさを表現できるようにがんばります。

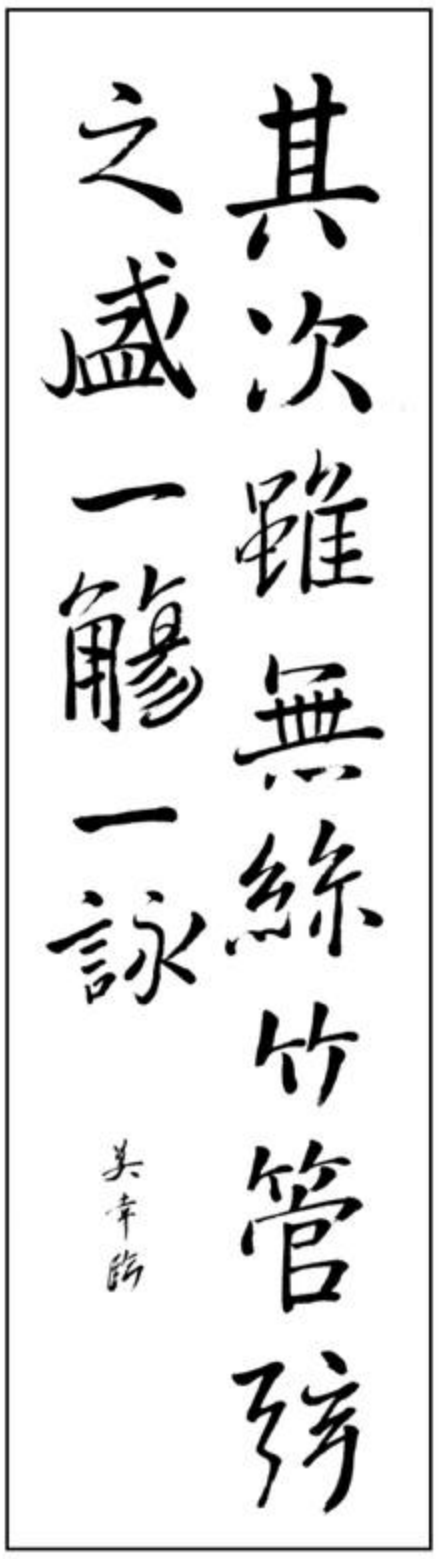


二十八、森美幸　二回生

臨書　楷書　王羲之『蘭亭叙』　半切

「其次雖無絲竹管弦之盛一觴一詠」

王羲之の字、好きです。がやはり、自分が書くとなると難しい。自分の書も好きになりたい。



二十九、山野敬子　一回生

臨書　行書　藤原行成『秋夜』　半切

「燕子楼中霜月夜秋来只為一人長」

百人一首の二十三番、大江千里の歌、『月みれば千々にものこそ悲しけれ我が身ひとつの秋にはあらねど』は、この漢詩から影響を受けてつくられたそうです。ただ一人佇んで、月を見るともなしに見ている、そんな秋らしい、風情が感じられる作品に仕上げられたら嬉しく思います。



三十、米田直紀　四回生

臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　半切

「春歸聊與客登臺芳墳誰識眞娘墓水品」

文徴明マジ格好良いな～！完コピしたいな～！と思っていたのが数ヶ月前。今では、ただの実験オタクへと成り果ててしまいました。というのは、練習不足の言い訳であります。四回生全員が参加出来る最後の書展ということで、気合だけが空回りしてしまった作品です。少しでも目に留めていただけると幸いです。

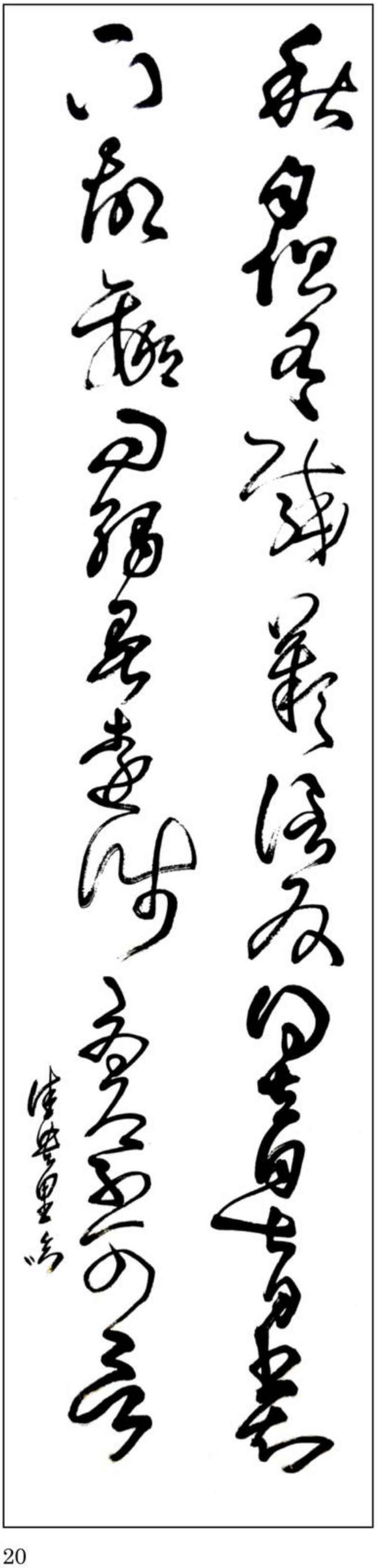


三十一、東佳央里　三回生

臨書　草書　王鐸『臨王羲之秋月帖』　二尺×八尺

「秋月但有感歎。信反。得去月七日書。知（足）下故贏（疾）問。觸暑遠涉。憂卿不可言。」

書き始めの「秋月」という部分が印象的な作品です。力強さの中にどこかやわらかさのある王鐸らしさに近づきたいと思い、練習しました。太く墨のはいった部分と細くなっている部分の差を活かし、字の浮き沈みがみえるような作品になっていれば嬉しいです。



三十二、大泉陽輔　二回生

臨書　隷書　楊峴『隷書仙傳拾遺語四屏』　二尺×八尺　四連

「羅公遠鄂州人……」

もっと流麗に、もっとのびやかに。


羅公遠鄂州人幼侍明皇下葉至開元中頃月夜乃公遠取半段青橙與明皇自寒空擲向空化爲大橋其色青銀公先如遠奪銀


向空擲向空化爲大橋其色青銀公先如遠奪銀

白此月宮也見練何曲寅衣也舞拾廣袖羽衣明皇也聞皆素

密記其殿調遂回卻顧其殿官依其殿旦名令宮也

東寅春
七十二嶺岁暘児陽穎臨

三十三、岡田卓也　四回生

臨書　楷書　『元楨墓誌銘』　二尺×八尺

「列耀星華茂徳基紫墀凝操形於天戚用能端玉河山聲金岳鎮爰」

卒業制作となりますが、精神面としてはむしろ、いつも通り好きな楷書をただ楽しんで書くという意識で取り組みました。ずっと追及してきた筆画の鋭さ、ここに私の「書道」を感じて頂けたら大変有難い限りです。



三十四、河原理恵　一回生

臨書　草書　智永『真草千字文』　二尺×八尺

「秋収冬蔵閏餘成歳律象調陽雲騰致雨…」

初めての二八作品ということや、原本は単調に文字が並んでいるということから、作品としてどう魅せるべきなのか悩み、文字の大きさ・配置の変化や濃淡を少し大げさにつけて作品性を重視しました。ご批評のほどよろしくお願いします。



三十五、鈴木貴也　二回生

臨書　行草　傅山『行草五言古詩巻』　二尺×八尺

「美八閩之風味日輸沙塞鄙即此大功徳救濟窮桑梓豈但波羅蜜布施方外士編戸不知覚天作陰徳紀特賜一佳児」

筆を運ぶ速度が遅くなりがちでしたので、テンポの良い行草らしさを意識しながら書きました。原書の軽快な線により近づけたら、と思います。



三十六、渡辺健介　二回生

創作　草書　『五言律詩軸』　二尺×八尺

「不知香積寺數里入雲峯古木無人徑深山何處鐘泉聲咽危石日色冷青松薄暮空潭曲安禪制毒龍」

僕が京大書道部に入って初めての軸作品が傅山の臨書でした。あれから一年以上が経ち、自分がどれだけ成長できたか知るという意味でこの作品を書きました。とはいっても、目指すところは傅山〝への〝創作ではなく、傅山〝からの〝創作でありたいと思っています。決して満足いく出来ではないので、もっともっと練習していきたいです。



作品紹介 ―禅居庵―

三十七、浅野彰浩　二回生

創作　楷書　『抄出千字文』　三尺×六尺

「覆興翫登渠禮觴旋罄瞻盡競竭藍嗣鼓」

豪快と荘厳。造像記風の書体で表現した。この作品一つ書き上げるのに平均三時間半。使い果たしたのは集中力、体力、忍耐力。そして墨と時間。理想を追いつつ時間に追われて書き上げた。もはや余力は無い。

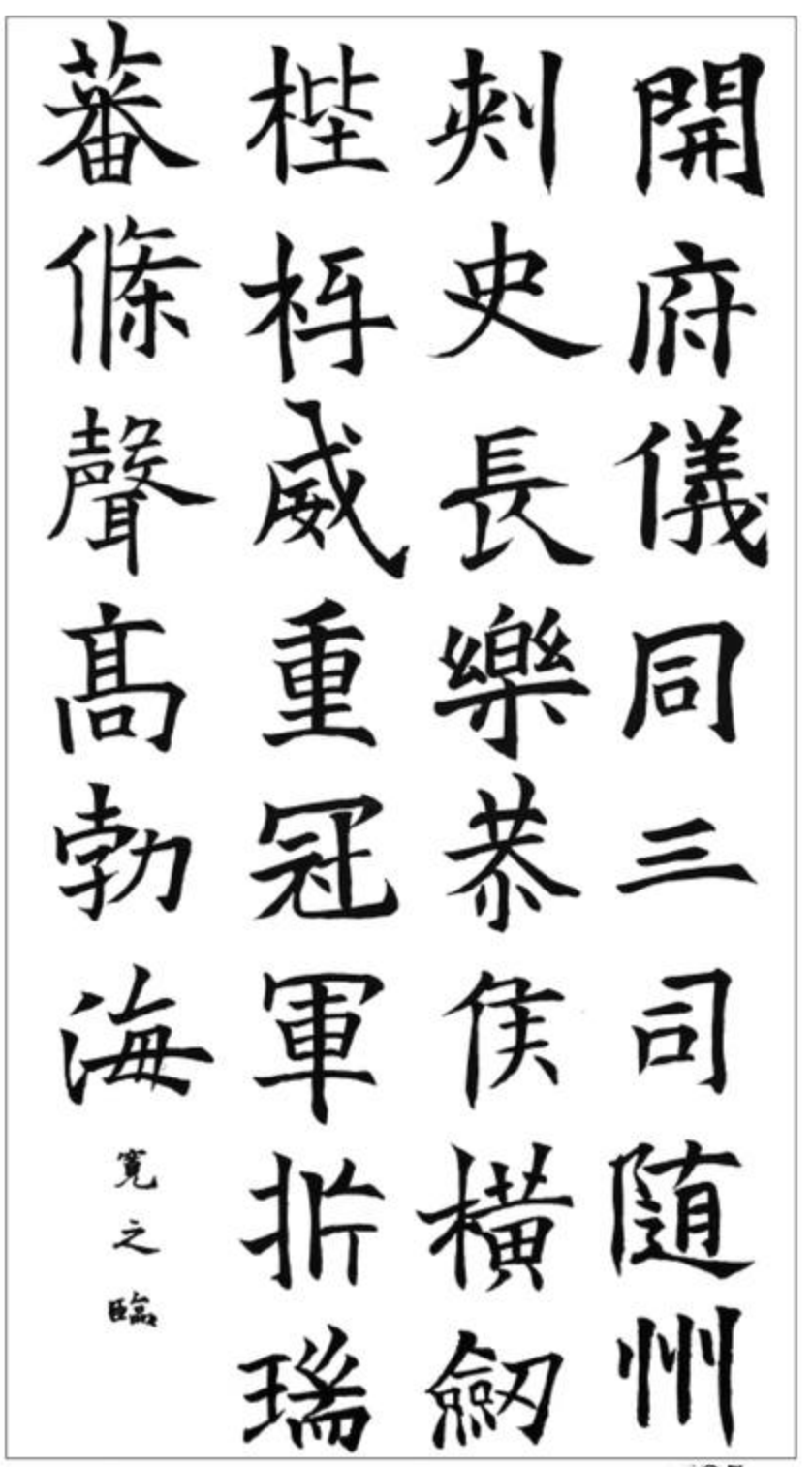

覆興翫登渠禮觴旋
罄瞻盡競竭藍嗣鼓

三十八、植島寛之　三回生

臨書　草書　墓誌銘『皇甫誕碑』　全紙

「開府儀同三資司随州…」

墓誌銘を臨書しました。墓誌銘の最大の魅力は鋭さにあり、さらに皇甫誕碑という墓誌銘は抑揚があります。この特徴を表現できるように線質にはこだわっていきました。


開府儀同三司随州
刺史長樂侯横劒
桂柄威重元戎
蕃條聲高大勃海
覧之臨

三十九、大倉悠　一回生

臨書　仮名　紀貫之『高野切第一種』　半切1/2

「ゆきのふりけるをよめる　貫之

かすみたちこのめもはるのゆきふれば

はななきさともはなぞちりける…」

あまり書いたことのない仮名に挑戦ということでかなの基本的な古典である高野切第一種に挑戦してみました。まだまだ未熟ですがご批評の程よろしくお願いします。

ゆきのふりける
貫之
かすみたちこのめもはるのゆきふれば
はななきさともはなぞちりける

四十、大西春菜　三回生

臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　半切

「雲巖四月野棠開無數清陰覆綠苔」

いろいろな人の書を見ていたところ、文徴明の書に一目ぼれしました。文徴明の書は大変きれいな行書で、最初から形はとりやすく感じました。しかし、細かい筆遣いなどが難しく、まだまだ改善点などは多数ございますが、ご批評のほど、よろしくお願いいたします。



四十一、大庭諒介　三回生

創作　行書

魏野『尋隠者不遇』

聯落横

「白雲滿地無人掃」

全紙に対して文字数を絞ったため、潤った部分と対比させて白を表現することや、字形や筆遣いに無理のない詩文選びを重点的に行った。限られた字数、限られた要素の中で、その一枚に懸けて自分の書道力を総動員する、まさに書道の醍醐味だと思う。

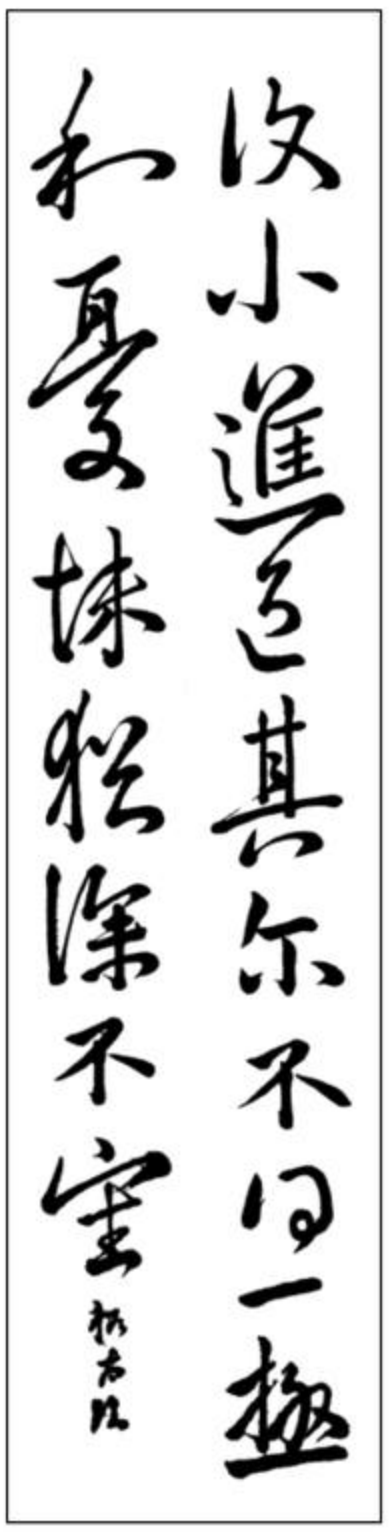


四十二、片野裕太　一回生

臨書　行書　王献之『姑比日帖』　半切

「復小進退其尓不得極和憂悚猶深不審」

王献之の書を臨書しました。字の鋭さに魅かれました。書道の作品を出すのも半紙より大きい紙に書くのも初めてで、わからないことだらけでしたが、先輩方にたくさんの助言をもらい、字の雰囲気のとらえ方・表し方や作品の構成についての基本的なことを勉強できました。とりあえず作品が出せてほっとしています。

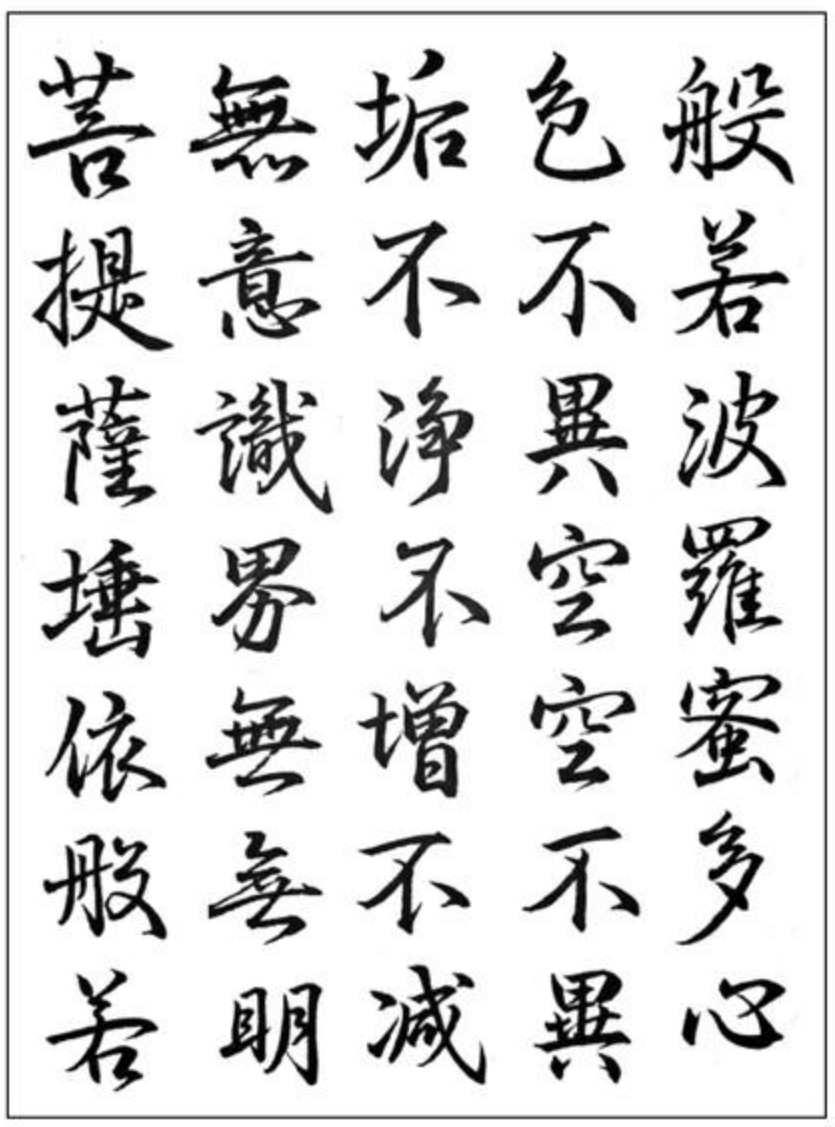


四十三、河原理恵　一回生

創作　楷書・行書　『佛説摩訶般若波羅蜜多心経』　半切二連

「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見…」

初めて細字を書きました。楷書と行書、それぞれの味が出せているとよいのですが…。制作時間はかかりますが、一字一字楽しみながら穏やかな気持ちで書くことができました。



（作品は一部のみ掲載）

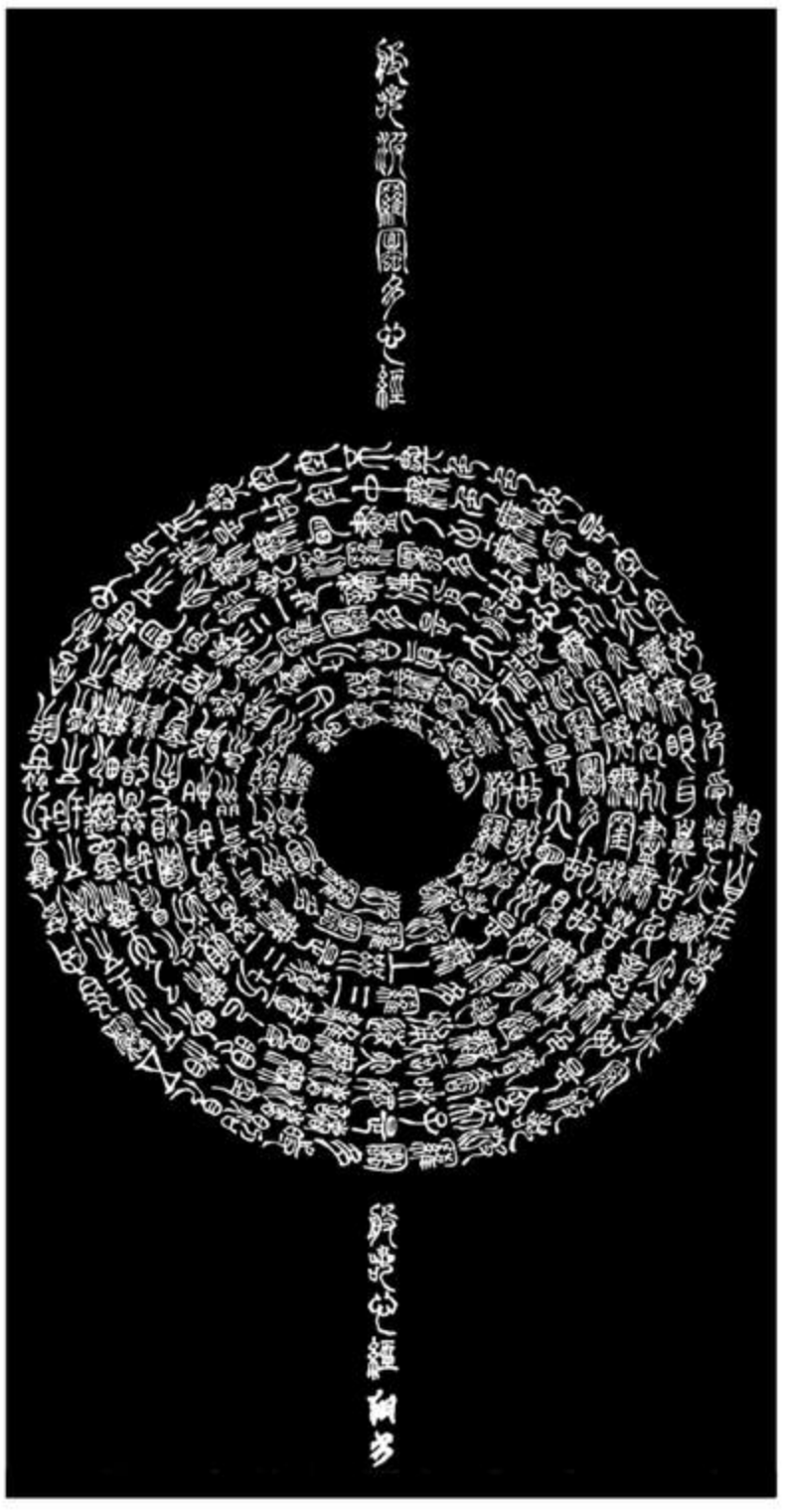
四十四、菊池悠里　二回生
臨書　行書　最澄『久隔帖』　半切
伝承安和、且慰下情。」
「久隔清音、馳戀無極。
最澄が空海のもとにいる愛弟子に宛てた(内容的には空海宛て)手紙の冒頭部分です。これといった面白味はなくとも、見る人の心に〝すっ〟となじむような、見ていて落ち着いた気持ちになるような、そんな作品を目指しました。



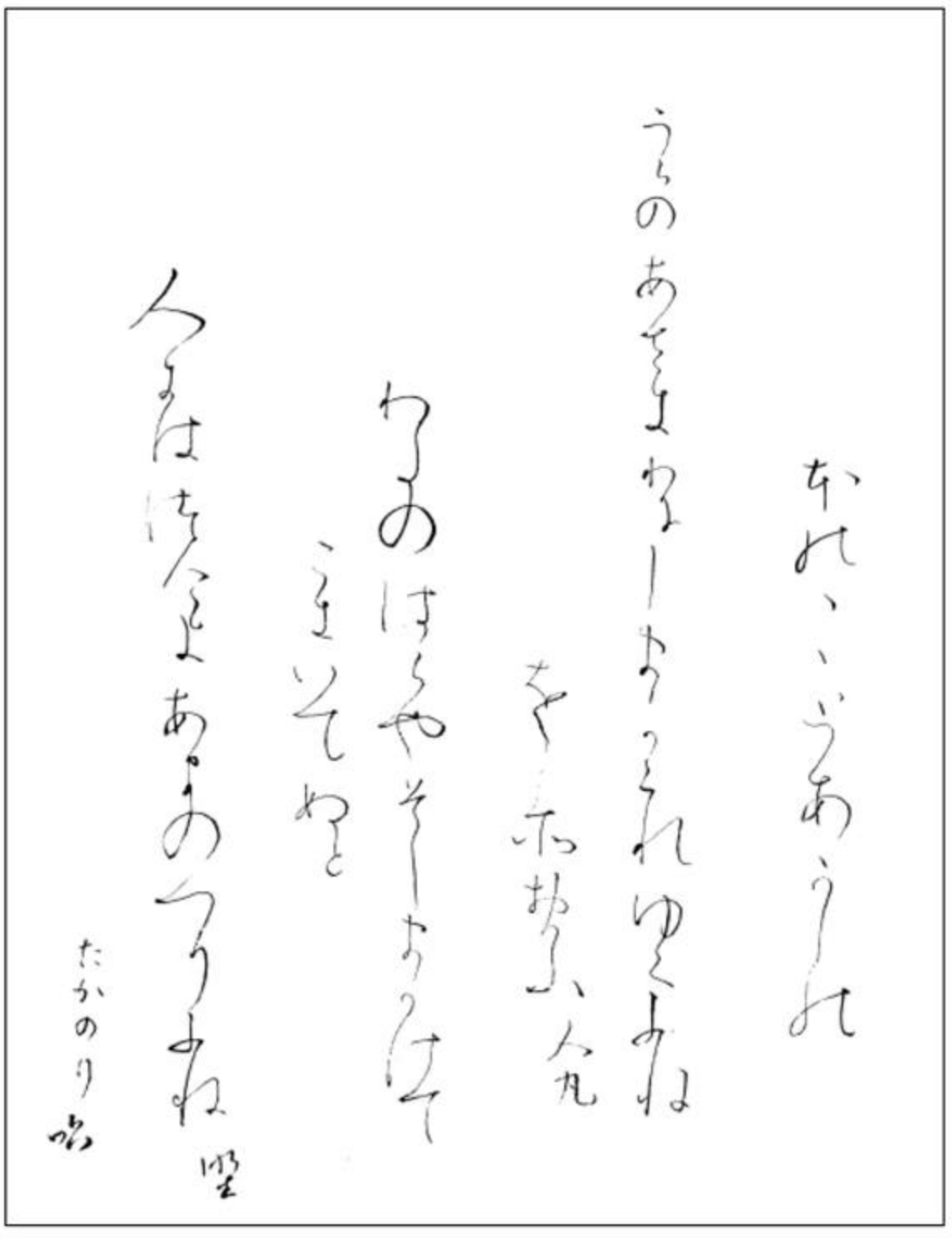
四十五、小島健史　一回生
臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　半切
「三蔵之秘局是以名無翼長飛道無根而永固」
細くて力強い線やアンバランスだけれど美しい字形。そういった『雁塔聖教序』の魅力を表現するよう努めました。特に〝飛〟の字の迫力と流麗さを皆様に伝えることが出来れば大成功です。



四十六、柴田翔　二回生
創作　篆書　『般若心経』　全紙
「般若波羅蜜多心経　観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄…」
涅槃寂静、我未だ至らず…。



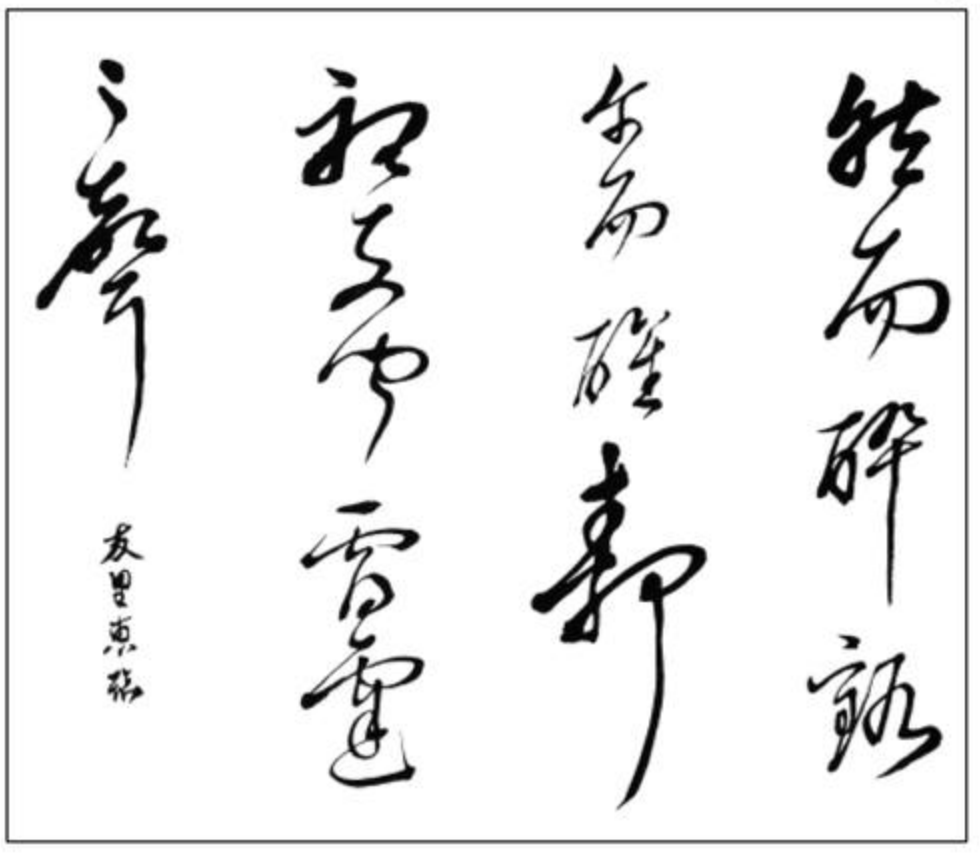
四十七、柴田尚紀　一回生
臨書　仮名　藤原行成『粘葉本和漢朗詠集』　半紙
「ほのぼの（本能ゝゝ）と　あか（可）しの（能）うらの　あさぎ（支）り（利）に（爾）　しま（末）か（可）くれてゆく　ふねをしぞおもふ　人丸　わたのはら　やそしま（末）か（可）けてこぎ（支）いでぬと人に（爾）は（都）げ（会）よ　あま（末）のつりふね　野」
今回仮名に挑戦しました。粘葉本和漢朗詠集は繊細で品格に富み、明治以降、仮名手本として親しまれてきたものでもあり、字の美しさで魅かれて書きたいと思いました。繊細さと美しさを表現するのが、なかなかうまくいかず、苦労しました。けれど、楽しんでかくことができました。これからもさらに勉強していきたいと思います。



四十八、石博昭　一回生
臨書　行書　趙孟頫『前赤壁賦』　半切
「扁舟　舉匏樽以相屬　寄蜉蝣於天地」
行書に挑戦した。素早く書くというイメージがあったが、実際はもっと丁寧で、リズムのある運筆を要求されたように思える。



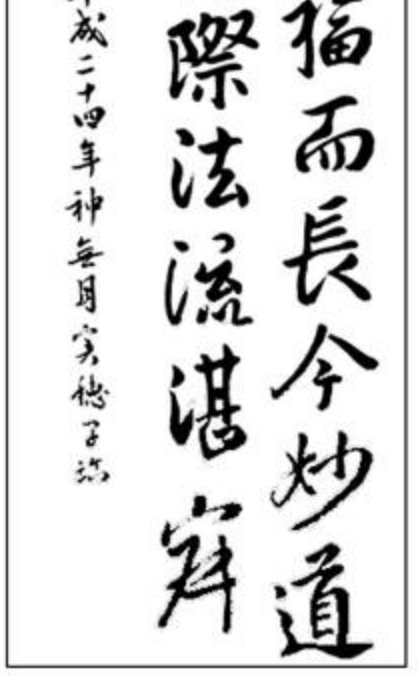
四十九、武井友里恵　三回生
臨書　行草　董其昌『酒徳頌巻』　全紙横 2/3
「然而醉。豁尔而醒。靜聽不聞雷霆之聲。」
キリっとした雰囲気と行間の余白に魅力を感じました。半切以外のサイズを書いたのは初めてですが、いろいろ考えたらこんな中途半端なサイズになってしまいました。技術的にはまだまだですが書いている本人は楽しかったので許してください。



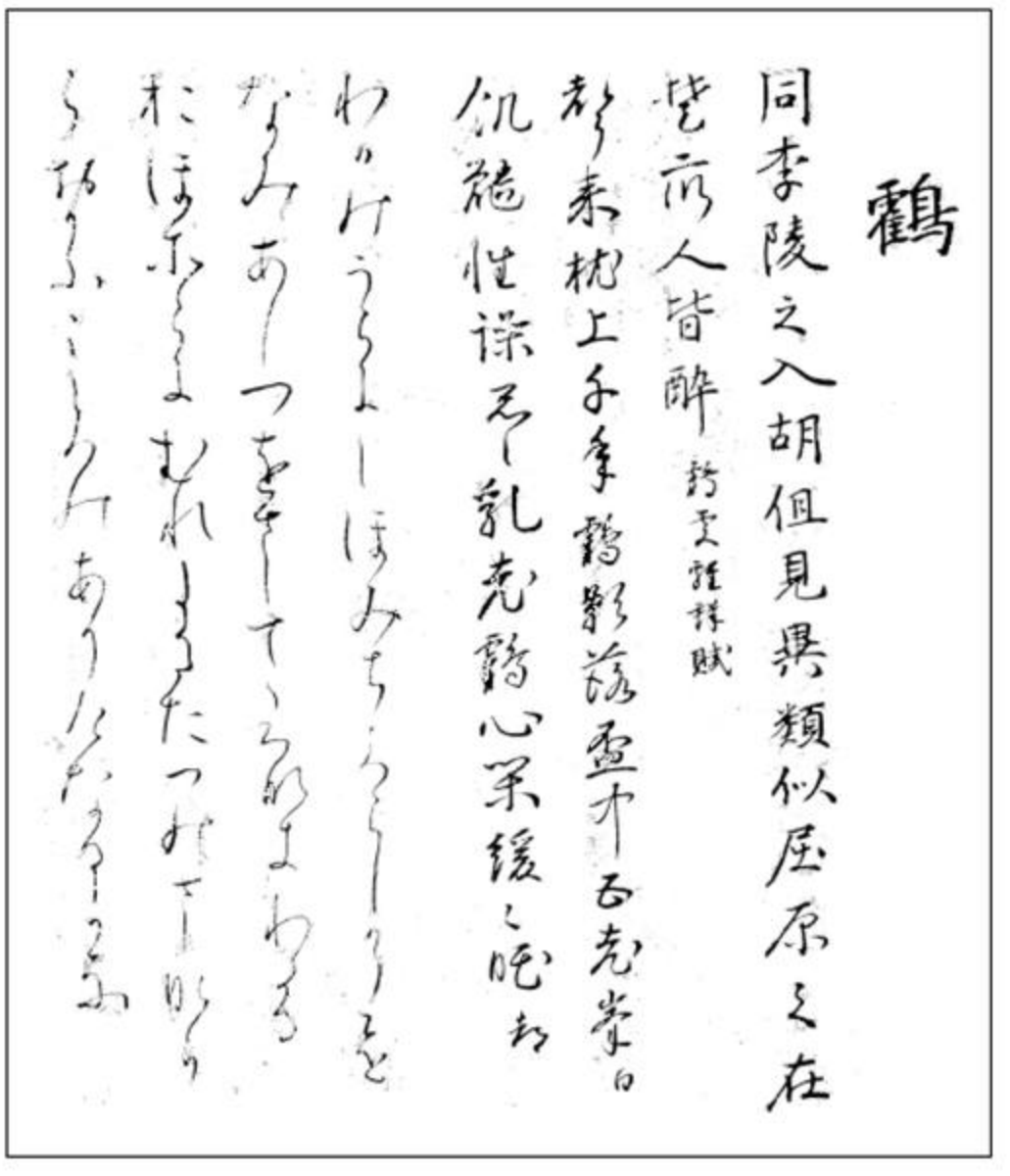
五十、辰巳鴻介　一回生
臨書　楷書　光明皇后『杜家立成雑書』　半切
「今欲向爐挙酒」
楽しんで書くことができませんでした。



五十一、寺田実穂子　二回生
臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切
「若隠若顕運百福而長今妙道凝玄尊之莫知其際法流湛寂挹之莫測其源」
仏の道というのは、深遠をきわめており、果てることもその源流を知ることもできない、という内容。すっきり流れるような崇高な印象を残せたらいいです。



五十二、戸髙郁穂　一回生
臨書　仮名　伝藤原行成『粘葉本和漢朗詠集^巻下v』　半紙
「同李陵之入胡、但見異類。似屈原之在楚、衆人皆酔。鶴処鶏群賦…」
書いたことのない仮名をやってみようと思い、漢字も書きたかったところでこの作品と出会いこれにしました。同じ漢字でも少し書き方に違いがあるところが楽しいです。



五十三、中川和也　四回生

創作　行草　『楓橋ニ宿ル』　全紙

「七年不到楓橋寺　客枕依然半夜鐘　風月未須軽感慨　巴山此去尚千重」

大学生であろうと、「書道展」を名乗って学外に作品を発表するということは、あくまで「一人の書道家」として評価されるということにほかなりません。書の道これ遠きを知ればこそ、なおさら、今を大切にしたい。これまでの少ないながらの積み重ねと、拙いながらの技術を集大成して、大学４年間の書道部生活にしっかりと一里塚を作りたい。そういう想いで、この作を作りました。



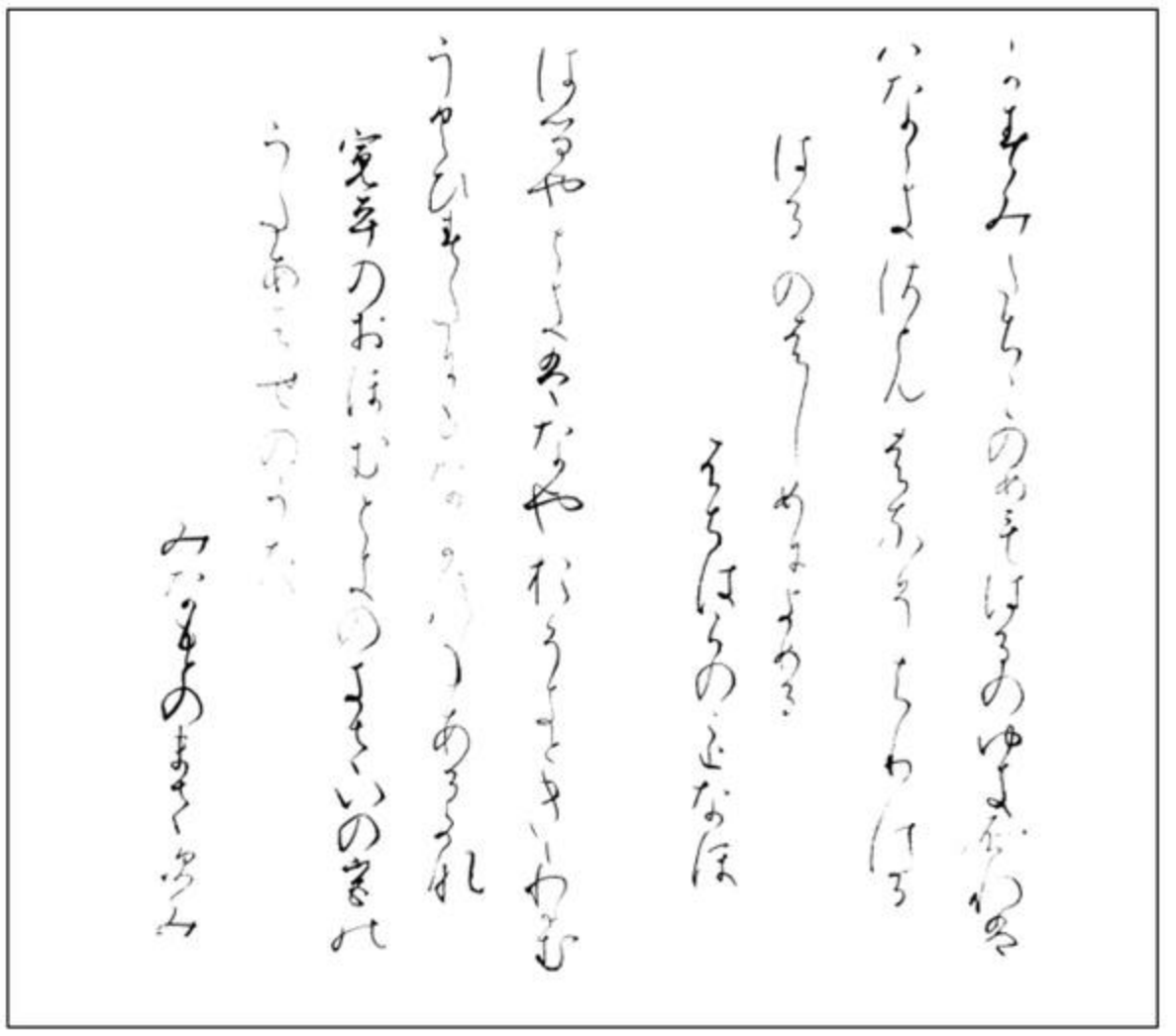
五十四、中谷百花　一回生

臨書　仮名　紀貫之『高野切第一種』

35cm×74cm

「かすみたち
このめもはるの
ゆきふれば
はなゝきさとも
はなぞちりける…」

高野切の持つ優雅さに惹かれて臨書しましたが、線の太細を出すことに苦労しました。ご批評よろしくお願いします。



五十五、中野綾香　一回生

臨書　行書　蘇軾『前赤壁賦』　半切

「自其不變者而觀之則物与我皆無盡也」

一目見て、躍動感がありながら整った、かっこいい字に惚れました。臨書や作品制作自体ほぼ初めてなので、バランスを考え整った一つの作品にする、まず文字を真似する、といったところを意識しました。作品の雰囲気を出すところまでいっているかはわかりませんが、まあかっこいいんちゃう、と思っていただけると嬉しいです。



五十六、永溝聡士　四回生

臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　全紙横

「大唐西京千福寺多宝佛塔感應碑文南陽岑勛撰朝議郎判尚書武部員外郎琅邪顏真卿書朝散大夫撿校尚書都官郎中東海徐浩題額粤妙法蓮華諸佛之秘藏也多寶佛塔證經之踴現也發明資乎十力弘建在於四依有禪師法号楚金姓程廣平人也祖父並信著釋門慶歸法胤母高氏久而無嫉是生龍象之徴無姙夜夢諸佛覺而有弥厥月炳然殊相岐嶷絶於葷茹髫齔不為童遊道樹萌牙聳豫章之楨幹禪池昧濬俗自涵巨海之濤年甫七歳居然厭出家禮藏探経法華在手宿命潜悟如識金環摠持不遺若注瓶水九歳落髪住西京龍興寺従僧籙也進具之年昇座講法頻收弥藏異窮子之疾走直詣寶山無化城而可息尓後因靜夜持誦至多寶塔品身心泊然如入禪定忽見寶塔宛在目前釋迦分身遍滿空界行勤聖現業淨感深悲生悟中渥下如雨遂布衣一食不出戸庭期滿六年揩建茲塔既而許王瓘及居士趙崇信女普意善来稽首咸捨弥財禪師以為輔默議荘嚴之因資爽塏之地利見千福有懐忍禪師忽於中夜見有一水發源龍興流注千福清澄泛灑中有方舟又見寶塔千歳次壬辰十月十七日聡士臨

五十七、西村有希子　四回生

創作　行書　『夜雪』　半切

「已訝衾枕冷　復見窓戸明　夜深知雪重　時聞折竹聲」

雪の降る夜の、静かで澄んだ空気を感じさせる白楽天の美しい漢詩です。そのイメージが伝わるような作品を目指しました。初めての創作に難しさを感じつつも、卒業制作として、書道部で四年間学んだことをぶつけました。

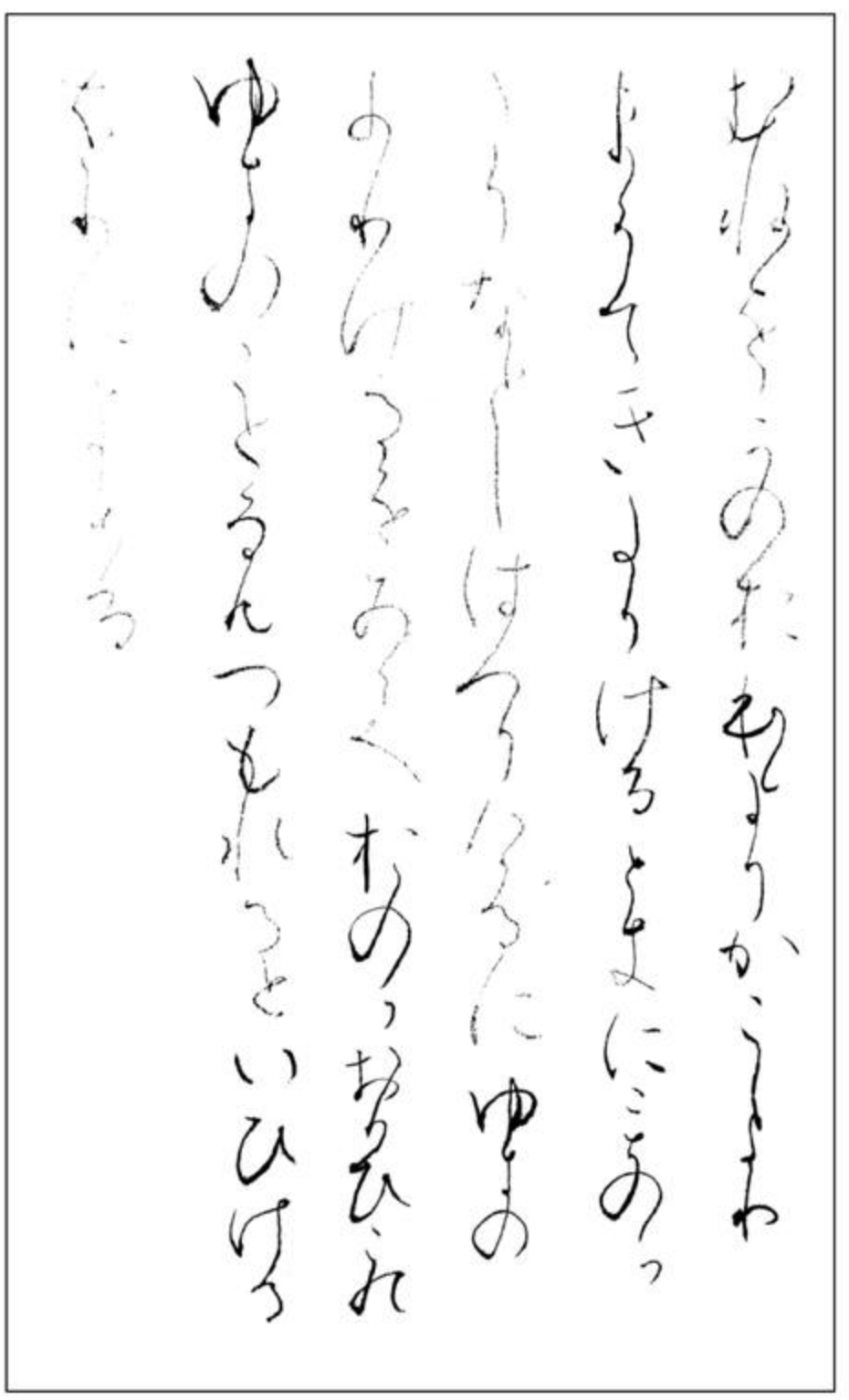


五十八、檜山葵　二回生

臨書　仮名　『高野切第三種』　半壊紙

「むねをかのおほよりがこしより…」

「仮名のお手本」と言われる高野切を臨書しました。字形がすべて端正で美しいところに惹かれ、自分も楽しみながら書くことができました。見た人にも優雅な気持ちになっていただければ嬉しいです。

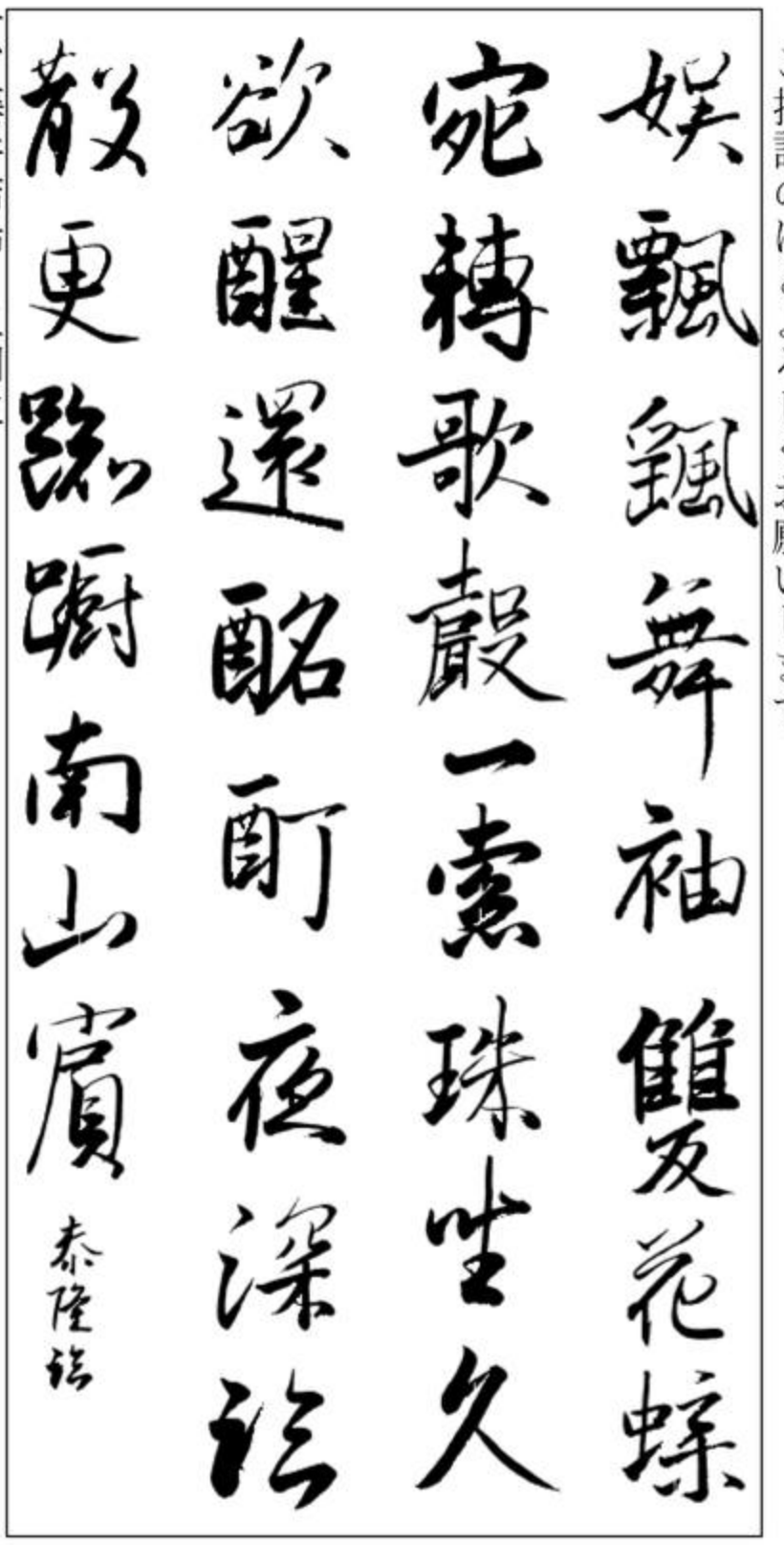


五十九、平野泰隆　二回生

臨書　行書　藤原行成『白樂天詩巻』　全紙

「娯飄颻舞袖雙花蝶宛轉歌聲一索珠坐久欲醒還酩酊夜深臨散更踟躕南山賓」

優雅で格調高く、落ち着いた雰囲気に引かれて臨書しました。表装も合わせた作品全体で、和様書である法帖の雰囲気を感じてもらえれば幸いです。ご批評のほどよろしくお願いします。



六十、藤井結稀　二回生

臨書　隷書　陳鴻寿『隷書八言聯』　半切 1/2 二連

「散此緗編遲還芳札偶有喜酒爰撫素琴」

文字の気の抜けたようなゆるい感じが好きでこの法帖を選びました。人里離れた山奥の小屋で、一日のんびり過ごした後、夕暮れにあったかいお茶を飲みながら書いたようなイメージです。



六十一、水谷慈　修士一回生

創作　行草　『自戒』　半切

「夫人必自侮然後人侮之学業才識不日進即日退」

孟子と左宗棠の言葉を書きました。自分に言い聞かせたくなる言葉ですい作品になってしまったかもしれません。ご批評のほどよろしくお願いしま(笑)。半切二行でどこまで遊べるか挑戦しようと思ったのですが面白みのなす。



六十二、宮下拓也　一回生

臨書　行書　王羲之『蘭亭叙』　半切

「仰觀宇宙之大俯察品類之盛所以遊目騁懐」

初作品です。いきなり〝至高〟に挑んだのはやはり無謀でした。柔らかさと、それと共存する鋭さ、これを表現する技量はないようです。まだ未熟な代物ですが、熟達するまでは人には見せないというのでは、上達もないだろうと思ったので敢えて出品します。見苦しい点も多々あると思いますが、どうぞ御批評お願いします。



六十三、村田真名美　三回生
臨書　行書　黄庭堅『松風閣』　半切
「老松魁梧數百年…」
一字一字の大きさや傾きはバラバラで線も独特なのに，作品全体ではまとまっている黄庭堅の作品が好きで再び挑戦しました。やはり難しかったです。



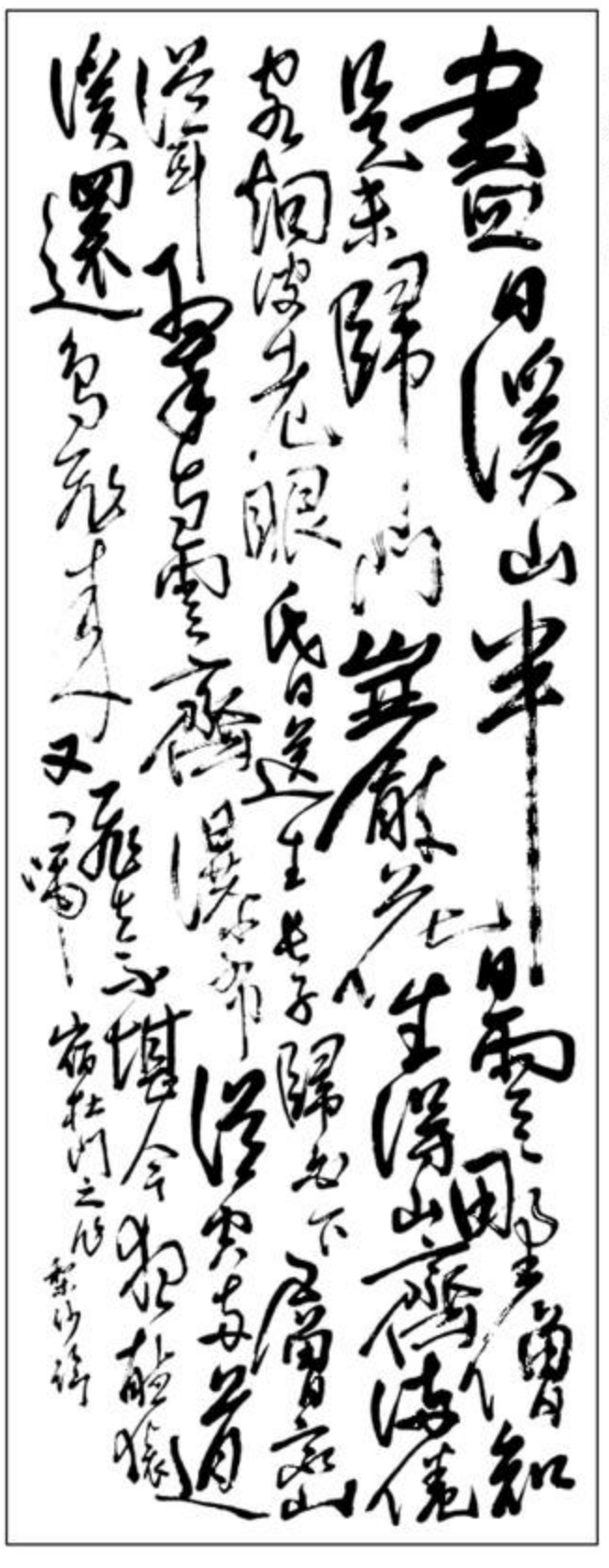
六十四、山口萌　三回生
創作　行書　『抜山蓋世』　聯落
「力抜山気蓋世　時不利馬不逝可奈何　虞虞奈若何」
【抜山蓋世】という四字熟語をご存知でしょうか？この熟語の豪胆さが好きでしたが、元の漢詩を調べてみるとその意味の無力感がすごく切なく響いてきました。そんな切なさが伝わってくれたらいいなと思います。



六十五、山本大翔　二回生
創作　調和体　『オトシモノ』　全紙
「大事な君のオトシモノ…」
お気に入りのアーティスト miwa の歌です。初の調和体かつ初の仮名。



六十六、吉田梨沙　二回生
臨書　行草　許友『送生長子歸白下・宿杜門之作』　二・六尺×六尺
「盡日溪山半曇々　野僧知是未歸門　巖花生得山齋滿　倦客烟波老眼昏
送生長子歸白下　層巒聳翠與雲齊　瀑布從空兩道溪　還鳥飛來又飛去
不堪今夜聽猿啼　宿杜門之作」
これまで書いてきた作品とは一風変わったものに挑戦してみました。私らしくないと言われるこの作品を書くことは、”自分の字“について考えるいい機会になりました。



六十七、吉田梨沙　二回生

創作　仮名　『しらつゆ』　半切

「白つゆ(遊)のいろはひとつを(越)いか(可)に(尓)してあきの(濃)この葉をち(千)ぢに(尓)そ(所)むらん」

藤原敏行「白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢに染むらん」

日常におけるふとした気づきを大事にしたいです。

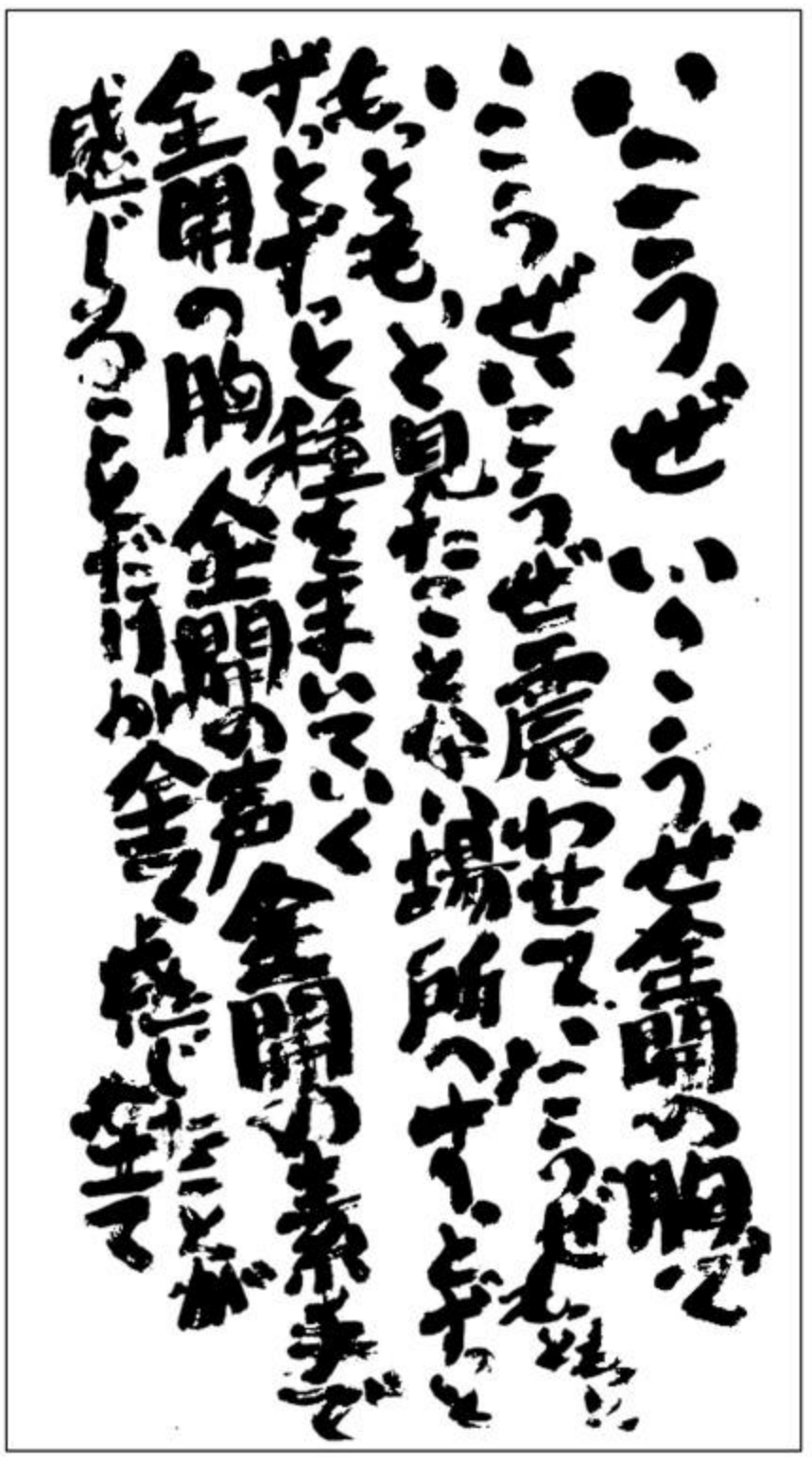


六十八、脇本啓太　三回生

創作　調和体　『深夜高速』　全紙

「いこうぜいこうぜ震わせていこうぜ…」

フラワーカンパニーズの『深夜高速』を書きました。ときどき口ずさみたくなります。でも、本当のところは声を嗄らせて思いっきりうたいあげたい。そんな曲です。

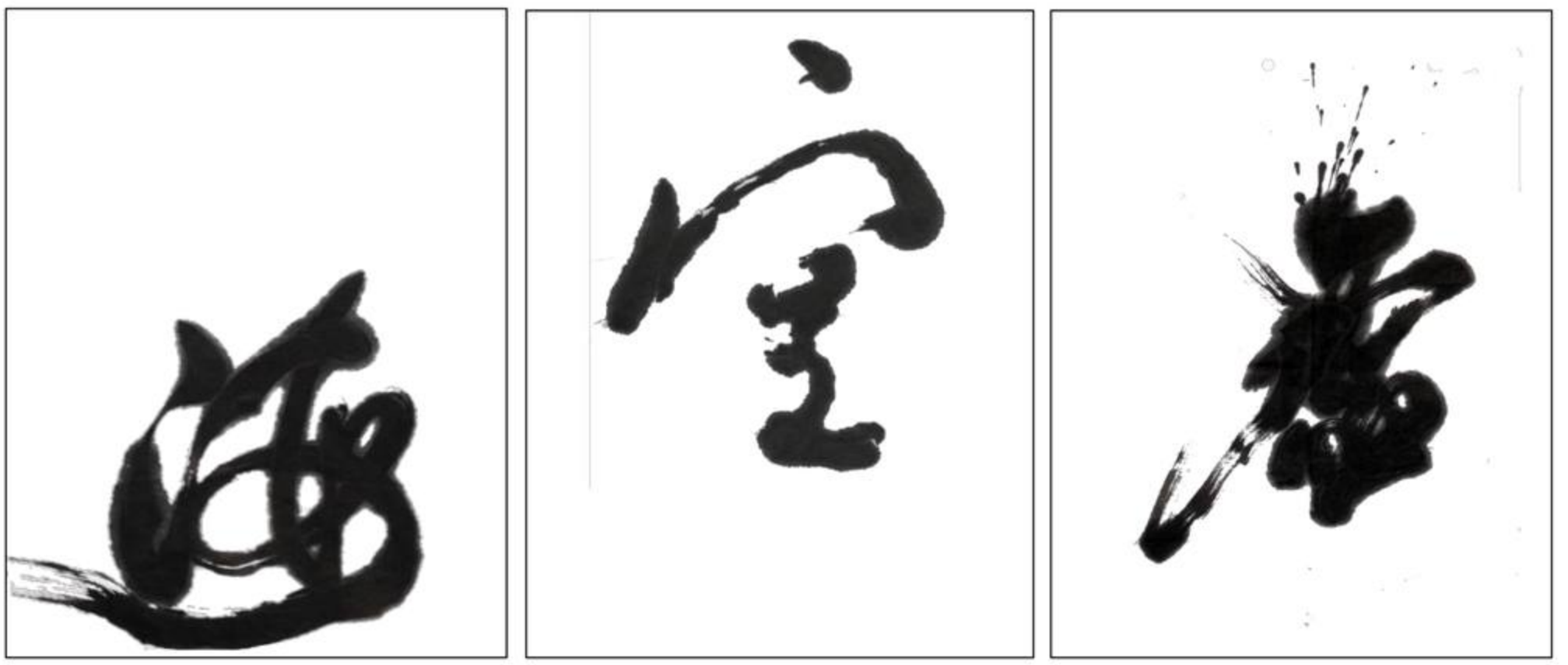


六十九、柴田翔×吉田梨沙×渡辺健介　二回生

創作　草書　『虚空海』　屏風

「虚空海」

三者三様、されど三位一体。



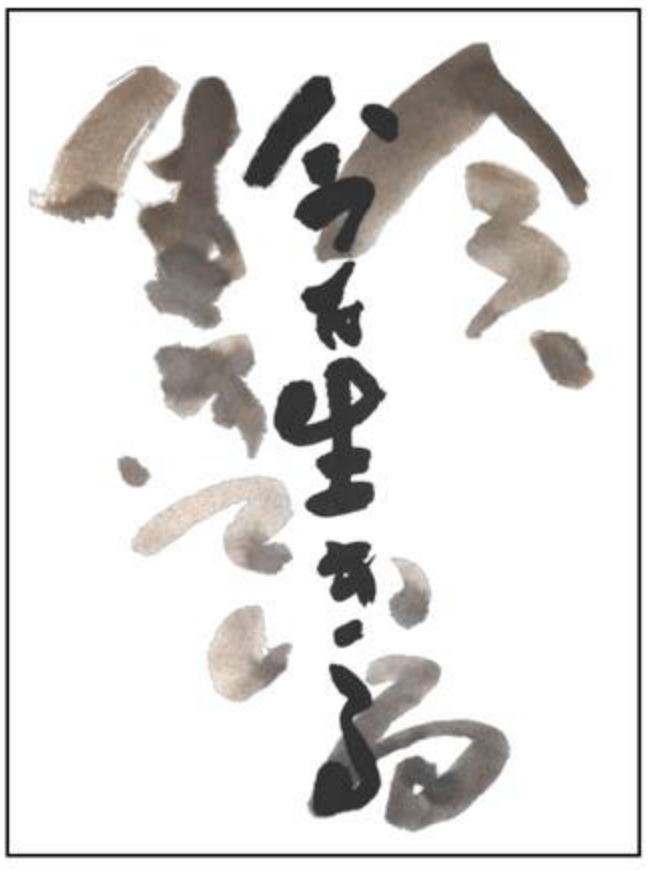
―小作品―

七十、東佳央里　三回生

創作　調和体　『生きる』　半紙

「今、生きている　今を生きる」

世間では日々誰かが命を落とし、日々新しい命が生まれています。最近では自ら命を絶ってしまうという悲しい事件が後を絶ちません。生きている限り、人生には辛く苦しいこともたくさんあります。だけど、私たちは今、生きています。この世に自分というたった一人しかいない存在として生きています。そのことを大事にしてほしい。今、生きているということを感じてほしい。今、生きている自分を愛してほしい。そんな思いを込めた作品です。



七十一、糸井健太　四回生

創作　草書　『李白之詩』　色紙大

「少年行　五陵年少金市東　銀鞍白馬度春風　落花踏盡遊何處　笑入胡姫酒肆中」

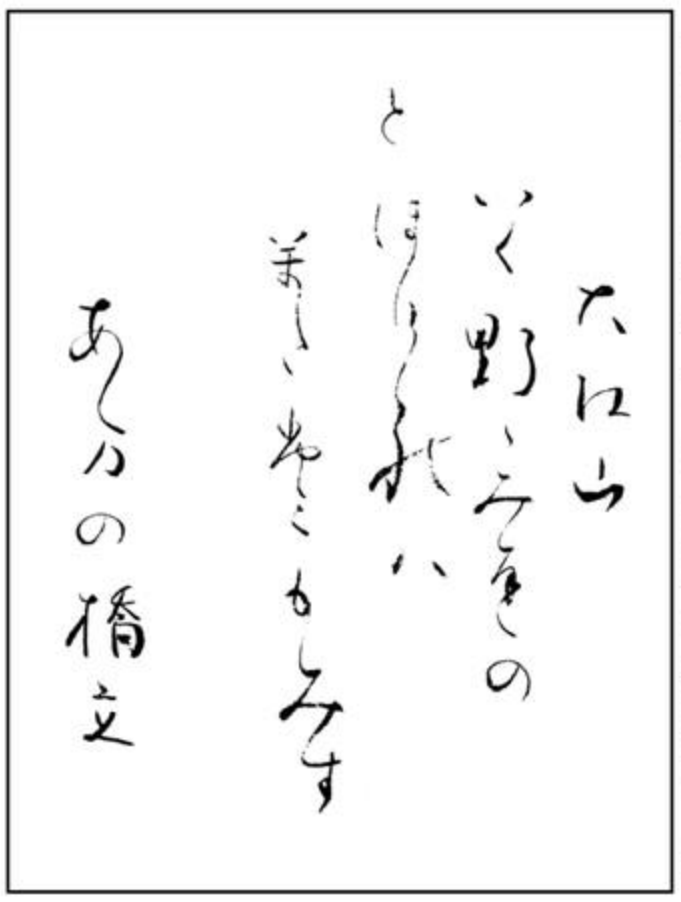
華やか一辺倒な内容の詩ですが、この詩作から暫くの後、唐が急速に衰退に向かうことを思うと儚さが言外に滲むような気もします。それはそうと秋の書展なのに春の詩を選んでいたと気付いた時には締切直前で既に手遅れでしたが、そのへんは開き直って伸び伸び書きました。ゆるりと御笑覧下さいませ。



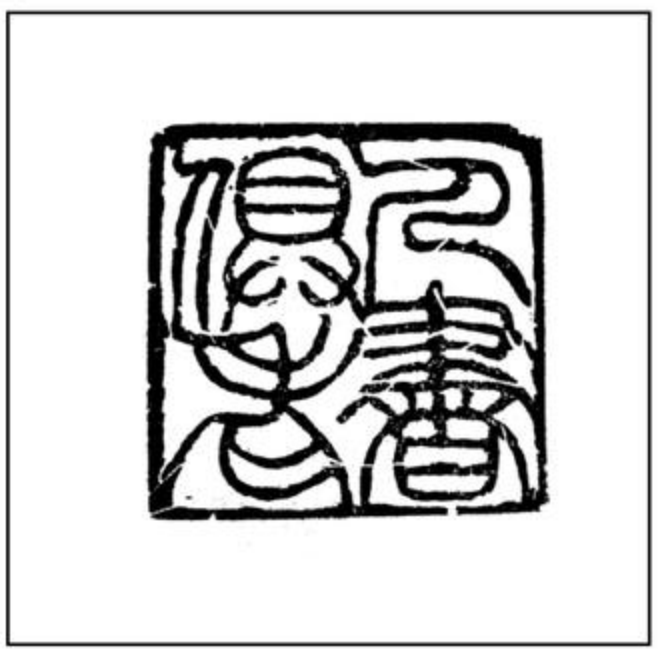
七十二、太田悠子　三回生

創作　仮名　『大江山』　半紙

百人一首から一番よく知っている歌を選びました。色々なアドバイスをいただきながら、自分らしくなるようにと思って書きました。



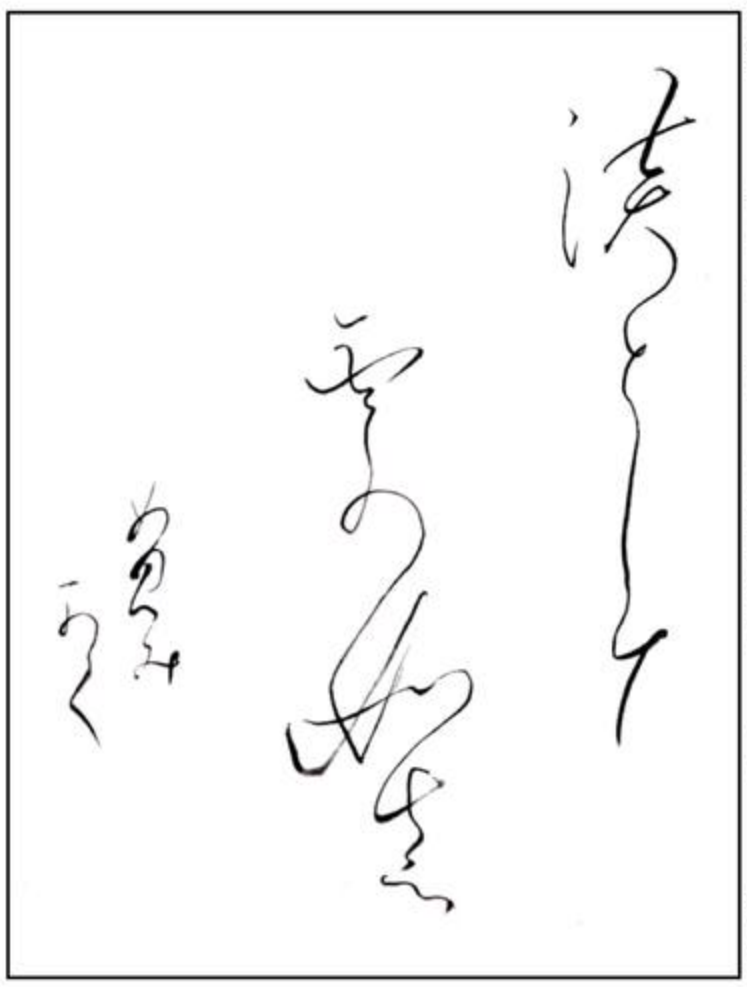
七十三、小野愛実　三回生
模刻　趙之謙『人書倶老』　3cm×3cm
「人書倶老」
初めて模刻に挑戦しました。細くてきれいな線を彫るのは思った以上に難しかったです。まだまだ未熟ですが、今後も模刻を続け精進していきたいと思います。



七十四、真殿知佳　三回生
創作　行草　『京都』　色紙
「京都」
京都が好きだーという気持ちをこめて書きました。



七十五、水谷慈　修士一回生
創作　仮名　『淡として』　色紙
「淡として雪のごとし」
杜牧です。寒くなってきた今の時期にちょうど良いかと選びました。久しぶりの仮名でしたが楽しく書けました。ご批評のほどよろしくお願いします。



七十六、山本大翔　二回生
創作　調和体　『オトシモノ』　色紙
「大事な君のオトシモノ・・・」
自己満足作品です。同じ題材の全紙作品がありますので気になったらお探しください。



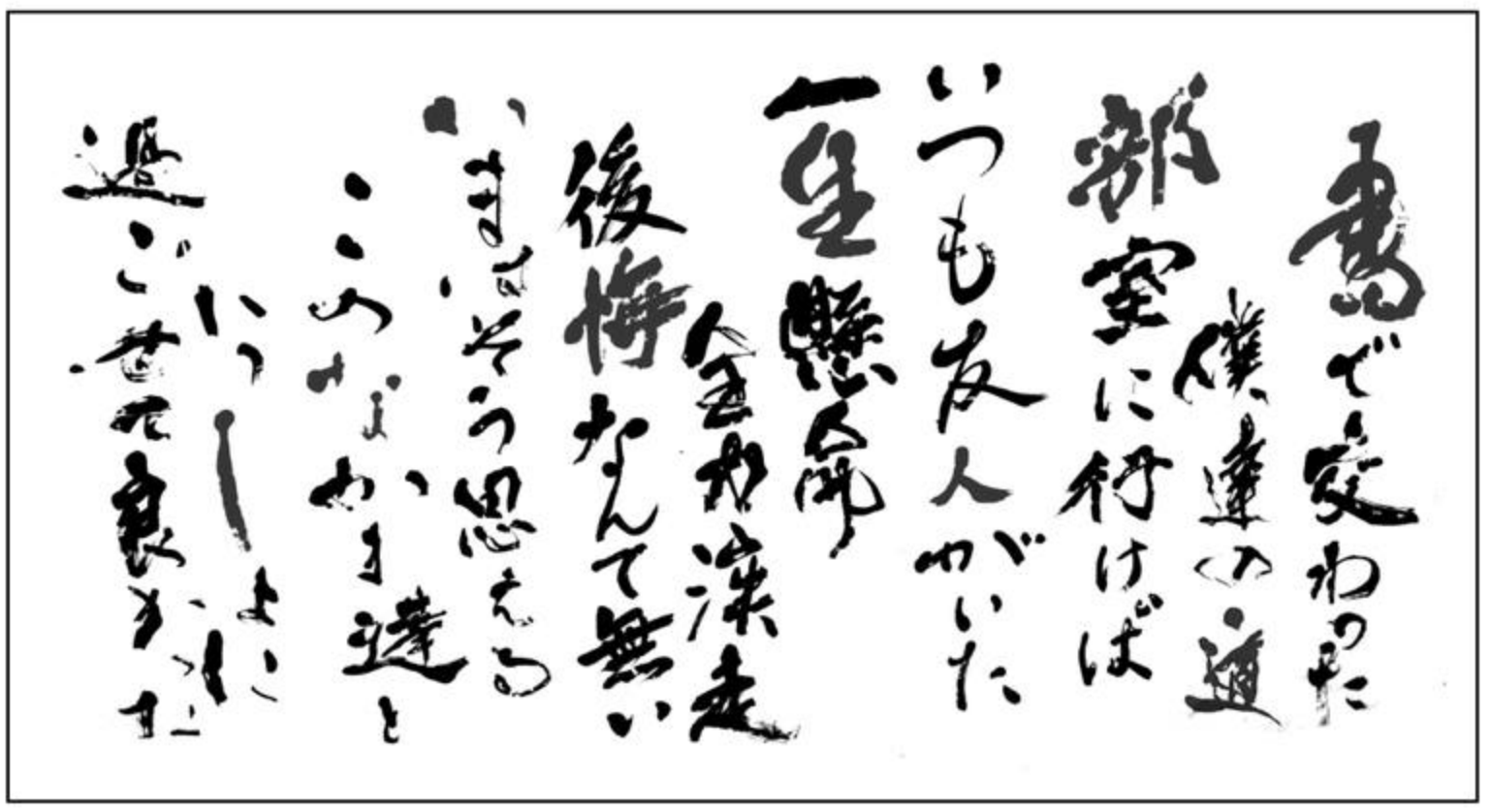
—合作紹介—

七十七、四回生（池田亜由美、糸井健太、岡田卓也、尾崎由布子、中川和也、永溝聡士、西村有希子、林田悠佳、米田直紀）

『書道部人生悔いなし』　4.5m×2m

「書で交わった　僕たちの道　部室に行けば　いつも友人がいた　一生懸命全力疾走　後悔なんて無い　いまはそう思える　このなかま達といっしょに過ごせて良かった」

卒業に際して、せっかくだから合作したい！とはじめた巨大作品です。時間を見つけては気の置けないメンバーで集まり、あれやこれや言いあいながら仕上げました。マイペースな私たち四回生が楽しんで書いている雰囲気が伝われればと思います。合作制作やその前後のたこやきパーティー等も含め、素敵な思い出になりました。



全体合作『列島の叫び』

日本列島を表現した立体作品です！各地域から集まり、また様々な場所に訪れている京大書道部のメンバー。それぞれの出身地や旅行先など、日本各地の「叫び」をユーモアを持って代弁します。

ぜひあなたのゆかりの土地も見つけてみてください。



This book was
made by the LeME